



091302-000-4

特43-67

引眉毛権妻於辰全伝

伊東 専三ノ編

M16

DBN-2180





五眉毛権葉於辰全傳之序  
 或の品はひの芳品皆権葉と扱ふるあり。然れ被入が車夫の  
 柳葉身まの権葉と二年ゆの物。實は権葉の影付し所を  
 と管は板元。権葉の板元は編り。本文出像の胆合は、葉を  
 口置の板元と作り。定條の儀の仕立をみる。看家の方一  
 と権葉の板元を。一、車夫の影の昔傳の事、順葉拈切ふ  
 へ板元ある。はま可た一個の板元の氏。その若くはあか  
 葉の色の香気うらやまを先編み、その香気は、板元は、  
 延ばすの油と想は、根葉は、板元は、葉の影を、  
 月夜  
 新編都子紙の作者 伊東橋塘

月夜

新編都子紙の作者

伊東橋塘



引  
まゆげ

権葉於辰

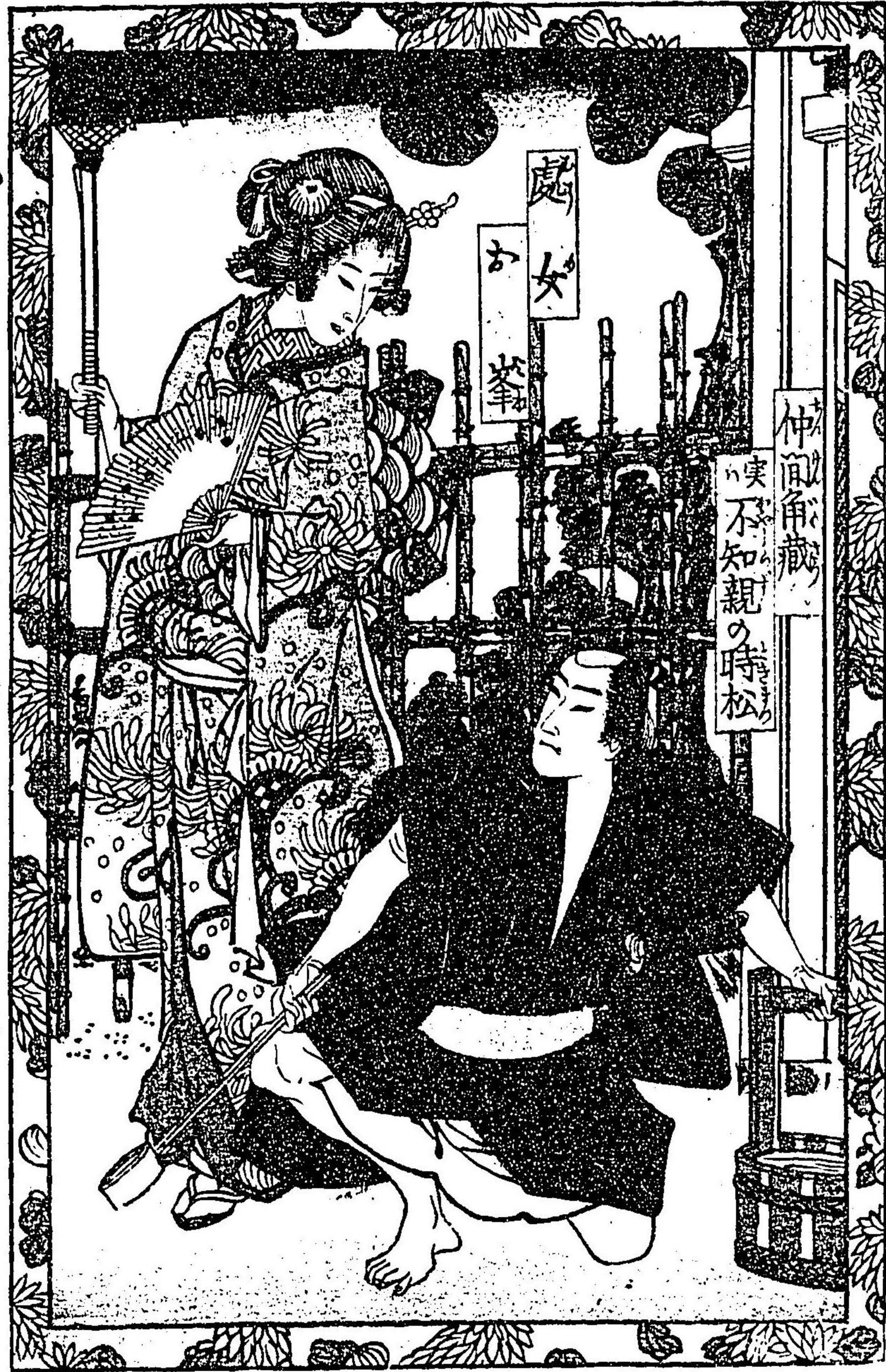
一冊より又切

橋塘作

國松画









引眉毛權妻於辰全傳目錄

第一回	締切の棄兒夫婦に幸福す	枕橋の奔馬慈母ふ災害す	一丁
第二回	小梅郷珠玉輿	大窪邸 稻荷祭	四丁
第三回	權妻春情を演る庭前の亭	風雨花火を散す兩國の川	六丁
第四回	暗夜の船中に悪縁初て結ぶ	薩陞の山上に行女刃も死す	九丁
第五回	恨を隠て毒婦兇漢を誘ふ	酒を試て小人不義も與す	十二丁
第六回	掛茶屋に於村病に苦しむ	石原橋に吉平慢も語る	十五丁
第七回	養母自尽して娘兒を説く	君侯視察して家隸に托す	十八丁



山住財永

漢夫三吉



第八回 殿の面前に責罪の答

妾の部屋に捕物の勢 二十丁

第九回 赤繩未だ結ず飯倉の町

入水生を得る芝濱の浦 廿三丁

第十回 投身の女身を殺さる赤羽橋

救身の男身を助けざる廣尾原 廿六丁

第十一回 於美音を匂引て鑊市木更津へ賣る

安兵衛を嘘喝て時松五十金を奪 九丁

第十二回 守袋の金圓お壘を陥入る

博徒の妬心お辰を受出す 卅二丁

第十三回 不知親の時松初て父親を識る

世棄兒の於辰初て母親と識る 卅五丁

第十四回 兩個の男子自ら罪を訴ふ

兩個の女子頼に佛に事ふ 卅八丁

通計一十四回全傳目錄終ぬ

引眉毛權妻於辰全傳

東都 伊東專三編輯

第一回

締切の棄兒夫婦に幸福す  
枕橋の奔馬慈母に災害す

哀れさの夜半に棄子の泣止の母お添乳の夢や見つらんと古歌の心も想とれて拾ひ上たる棄子より幸福を受けまた禍災も起る一條の物語あり江戸とい言ど都會を離れ都に近き小梅村隅田川邊に年久しく住ぬる夫婦の者ありけり本夫の名と六藏といひ妻の名をお村と呼び本夫の邊で切出す草花類を淺草本所深川までも賣歩行其日く送るる夫婦の已む四十路の上とや、こゆるぎの五十年に近くある物から子といふ者の有ぬを互ひひ嘆ちるるち嘉永三年の長月中旬本夫の淺草へ用事あり夜と籠め家へ歸り來る道さへ例の心切通りへ來れば頼りに小兒の泣聲あすい不審と月影を灯火とるして其所か此處かと思廻す側に草折敷一個の小兒の寐かしあるよぞ六藏の見て不便に思ひ抱き上げればつたりと泣止顔をつく



づくと見れば玉をも欺く計りの女の子にして抱れたる六藏の顔を見て莞爾くと笑ひ掛し  
 又此方の日頃見あきを愁ひ神に佛に祈りたる其御利益か斯る兒を思はず拾ふも何かの因縁  
 我子とあして育んものと懐中に入れ立上りしが實の親を何かの知證據の物もあらざるやと  
 四邊を頻りと探したれど夫どと思ふ物のあく只切の川縁に穿捨たりし女の塗下駄一足あ  
 りしお度胸突き緒の此子の母親の我子を茲へ捨置て此切より身を投しかと思ひいよく  
 不便に成り抱きて家へ立歸り妻にも此よし物語るにお村も小兒の薄命を哀れに思ひ母親の  
 横死を嘆さかゝる時通り合せて拾ひし日頃信する神佛が我々夫婦に授しされば育て上さ  
 ば産の親もさぞ喜びて成佛おし上てす功德の有まじなど言あへりつゝ腰附の巾着を能く見  
 るに丸み鬼蔦の紋ありて中を開けば種々のお札お守りあど在る中に臍の緒書さへ籠ありて  
 嘉永二年三月三日誕生由兵衛長女たつ母もよと記しあるよど夫婦の僅は兩親の名を知もの  
 うら住所の知ず是ぞ此子の身の守り二歳といへば乳あくも食物にして育べしと二個のいよ  
 いよ寵愛して産の子程に可愛がり掌中の珠髪挿の花とをでつゝ過す月日も立ち疱瘡癩疹も





軽く濟せ出氣も非ず育立て元治元年に十七の春を迎へて美しく珠の容貌雪の肌柳の腰の柔軟にて洛陽の人も羞る計りの姿で有る身に襪をまとへど他人の目も立て業平橋といと近き小町娘と言なせり當時本所縁町に高三千石賜りぬる大久保忠左衛門といへる旗本あり父公と大久保忠堂といひ未だ五十の坂と越ねと一子忠左衛門が廿五成しを以て家督を譲り其身の隠居し忠堂とこそ名乗けるが世と脱れたる徒然に屋敷の中の遊びも飽き今日へ向島ある白髭明神の社まで遠乗せんと馬を出させひらりと乗て家来つゝと捨鞭打て出たるの同年二月の事なりしが忠堂の大川端の通りを頻りと駆させつ吾妻橋をバ横に見て枕橋の方へと向け曲らんとする其折にお辰の母のお村に從ひ淺草寺に參でんと來掛る道の出合頭飛せて來る忠堂の馬ははしなく出會しに嗟嘆といへば彼方もまた除んど手綱をかみ繰ど止め兼たる奔馬の勢ひ思ひすお村と觸倒し肚を馬足に掛たれば暫しも溜らずアツと叫び其場へ椋と倒るゝにぞお辰の淺間し這の如何と母も取附介抱あすめり馬の其まゝ一二間行すぎたるを忠堂のやうくにして乗止め下て馬をバ側に繋ぎ藥籠よりして藥を出しお村に

吞せて介抱するうち二三の家來のやうくと此所へとて馳附たるに忠堂の我過失て馬足よ掛たる仔細と述べ手當をせよと言しうバ家來も驚き立寄て種々すれば息吹返せどお村の痛みに堪兼て口さへ聞れぬ景状あるにぞ忠堂の娘も向ひ而て汝等の何處の者ぞと問れてお辰の顔と上げわたくし共ハツイ此邊り小梅村に住ものにて花賣六藏の妻娘あるが今日淺草の觀音さまへお參りせんとて來る途中母が不測の災難ゆゑ途方に暮てをりますると餘る涙を目も溜ていふ此娘の容貌と心ともよく能見れば塞々しげなる姿に似ず貴妃衣通も彌増り一切中の魚も沈み受地の郷の鴈も落ち待乳の山の月も閉ぢ隅田川邊の花も羞づ實に比ひあき美婦人あれバ忠堂の斯る婦人のまた有可さかど見惚つゝ我にも有らで茫然と暫しイミわたりしが小梅といへバ程近ければ我れの花賣六藏とやらんの家に至りて詫もせん汝等二個の怪我人を静み擔て彼所に至れ又一個人の我馬を引て屋敷へ歸るべしと言バ家來の畏れより一個の馬を引て歸り二人のお村を昇上てお辰又道の案内させ小梅村へと行わとに忠堂も附添て全く那處へ至りける六藏の女房子が淺草寺へ參るとて出し間もなく女房の何處やら怪



我を爲しが如く知ぬ若黨に擔れ來つお辰も供に歸り來りしおとに立派の武士が附添るに  
ど少も譯らずお辰に問へ母さん途中で怪我をさされしが委敷事のお武士がと言つ、其所  
へ蒲團を敷ら母を寐かせて介抱する其況つや、合點行ね六藏のた、鶴鷺、と其所等  
を廻る耳なりけり大久保忠堂の座敷へ登り主個六藏を近く招き近頃羞入し事ながら余の本  
所總町に住む旗本の隠居大久保忠堂といへる者なるが今日白晝まで遠乗に出たる途中枕  
橋の側ある曲り角へ來掛りて出合がしらとい言ながら貴下の妻を馬足は掛け觸倒せし馬  
術の未練面目もさき次第ながら見れば大怪我にも非るゆる介抱あして家來お昇せ送り歸し  
て我もまた詔をもあさんと立寄たる、此事何卒内分は頼やさん心底ありと詫て懐中の夾囊  
より金一包み取出し主個の前へ差置て是の如何も些少あれども藥の代ともせられお余の  
大慶に思ふかしと慇懃にこそ述たるに初て知し妻の災難觸倒したる其人の御旗本の隠居と  
いへば其ま、馬を駈られて行過らるゝも詮あきに厚く介抱有しのみか、家來おか、せ我  
家まで送り賜りは自身にお出のありて下さすの我お詫らせ大枚の金さへお恵み下さるとい

有難さまで勿体なき殿に向つて何をかやさん恐れ入たる次第ありと思へ反つて氣の毒あれ

第二回

小梅郷球玉興  
大窪邸稻荷祭

然らばまた六藏の過失の言ながら忠堂がいと厚き言葉の上へ金までも悪くれしを氣の毒と  
思へば左右ある是を受す言へ行合の災難にして些ばかりの怪我と致せしとて命に抱る譯に  
も有らねば其心配は無用に成し下されと二度三度推辞と彼方の受引ず願ふ事にはあら  
ざれど設此傷が案になり變事もあらば此方にて決して見て居まじく又病中もをり、の  
家來を以て問するも充分療養加へる様にと言置家來を引連て歸りたるおと四五日目に  
或の着類或の金またの肴と恵よこすに六藏夫婦のいよ、以て氣の毒と思ひながら此助  
に因り充分に療治をせしかば女房お村の一月ほど經て打傷の全快あせしに六藏とお辰の喜  
び一方ならず中にも木夫六藏の大久保家より過分ある度々のお恵ありしお因り全快したれ  
ば屋敷へ出此喜びをやし上んと田舎人ゆく律義もの挑の早咲櫻の枝など多く携へ色も濃



さ縁町へ出てゆく然ばまた大久保忠堂へ我過失より花賣の六藏の娘お辰をバ計らす見  
 初如何もして妾に爲さんと思ふより然はどの怪我に非る物くら夥多の東西をバ恵みやり  
 親の心を結び置幼年よりして側に遣ふ用人田上金吾を聘び我斯々の者を見れば召仕のん  
 と思ふゆゑ汝よしるに計へかしと仰ありしは用人金吾の奥様昨年逝去の後にお側に侍り  
 て御介抱とバ申し上るお召仕もあれかしと殿様とと大奥にてもをりく仰も有たりしが  
 は隠居さまが今如此と仰せありしを幸ひありと當主大久保忠左衛門は簡様くくと申し上し  
 に身分を質して仔細あくバ取計ひて差上よと是すら異議の稀らざるより田上の委細畏まり  
 屋敷の者もて近邊を問合すれば彼お辰の平常親に孝行のみかひ今迄淫を行ひも絶て聞たる  
 事あらじと衆口正可に言しかバ田上の安堵し近き中行て六藏夫婦にも話したるうへお手許  
 へ登させなんと思ふうち或日女房が全快せしお禮の爲とて六藏が屋敷へ来る節よしと金  
 吾の吾儕の家へ招き其後の安否を問ふとせし末は隠居様が云々の仰もあれバ苦しからずバ  
 此お屋敷へ登るの如何仕度の金の其方の望み通りに渡す可しと懇談ありしに六藏の花賣風

精の不束ある娘お辰がお目に止りいと有難き其仰せ妻が過分のお恵を受たるは恩の萬部が  
 一報に奉るの修奉公を勤するに上りたれと歸りし後に妻子にも一應申し聞たるうへ確に  
 お返事申し上ん是すら異存の有まじけれと思ひ奉れと一個にてお返事さへも成兼ねれと言  
 へ金吾の點頭て如何もそれの至當あれバ篤と相談したるうへ再度返事をやされよと暇を  
 へも給ひりけるにぞ六藏の立歸り妻と娘を近く呼び今日お屋敷にて御用人の田上様より云  
 云の仰ありしが是こそお辰が出世性なくして玉の輿てふ世の偶談に漏ぬ娘が幸福のみか  
 の夫婦も樂が出来るといふものお女の心の如何ぞやと問はぬ村も夢かど喜び馬に蹴られて  
 怪我をせし其災禍が幸福と成て娘が出世をれば此上もあさ事あれバ吾儕に於ての喜びこそ  
 すれ何で否を言ませうお辰も定めし喜びあらんと言れて普通の未通女ありせば恥かしさも  
 又増可きを其性毒婦のことあれバ生心附き男欲やと思ひ居しに旗本の勢ひ高き隠居の目に  
 止りて屋敷へ上るからの今の襦袢に引かへて綾や錦と身に纏ひ物見遊山に綺羅を飾り時  
 く驕りと爲んものと思ふ心のとや出たれば毫も恥る色はく然いふ方の添近く仕へ奉るの



願ふてもなき身の幸福ふていへば能かに願ひ  
 ありと判然言ふ夫婦の打笑み六藏の又其翌  
 日田上の方へ至りつゝ妻の喜び娘の承知と委  
 く話したりけるお金吾も早速相替の整ひぬる  
 を賀したるうへ當主ならびに隠居の方へ其旨  
 斯と申し上し二個も喜悅のその中に忠堂の  
 思ふ女の屋敷へ登るゝ又一汐の喜びありとて  
 田上に命じ仕度金さへ惜氣もあく若干下て遣  
 へせしにぞお辰の襦袢を脱代て今日の羅綾の  
 袖袂四邊の者の目を驚かす不測の出世に屋敷  
 へ入る其日の黄道吉日を撰びて朝より造り立  
 て待ば程なく迎ひの者紙打黒塗立派ある乗物



擔ぎて参り來つ若黨仲間夥多の者庭先狭しと居ならびつ首を下て敬へば賤が伏屋を立出る  
 お辰の磨きし珠の肌容鏡の比ひ稀ある上着飾る衣裳の高尙なる六藏夫婦の常々見る我娘と  
 の思ひれぬまで見惚て茫乎と立のみありお辰の迎ひの者に會釋し移る乗物昇上し殘る家來  
 の前駆後從掛聲高く縁町の屋敷へさして歸り附へお辰の隠居を初として當主夫婦に目見  
 えさへ首尾よく濟せ部屋を貫ひ隠居が枕の塵と取へ寵愛一方ならずして衣類諸道具髪飾  
 り凡そ欲しと思ふもの言へ忽地前より顯れ花見芝居見の遊山の更あり紅葉見雪見も言がま  
 にまに行へれずと言ことる或時の高樓は喧すさまで絃歌と奏して永き春の日をも短しと  
 嘆ち又或時の奥殿に更丈るまで酒宴と催して短き冬の夜も永しと思ひ人世無上の歡樂と究  
 める耳かひ双親も娘お辰が蔭に依りて扶持も給りりそり、くの頂戴物さへ多くわきへ貧苦  
 を忘れゆるやかに月日を消光の殿の賜物と六藏夫婦の疎かみ思ひなきとも是と違ひお辰の  
 榮花身に餘れへ隠居の早これ四十年に餘り親とも言可き年寄を嫌ふ心の出て來つ當主大久  
 保忠左衛門を見れば年また三十年に遠く目元すしく色白く炭然とせし男振にお辰の早晚



胸を焦し折がなわらば心の中思ひの丈を明々地に言ん物とぞ待たるに其年もとや暮ゆき  
て翌嘉永四年の春二月とあれは初午の日に必ず庭内の稻荷を祭り庭木戸を開いて諸人に  
参詣させ所々に行燈の繪地口あどを掲列ねまた小休所を構造て屋敷の女中を茶屋女に扮担  
あどして茶を振舞菓子や團子など振舞を是る屋敷の例とあせば今年も二月初の八日の  
初午の日に當りしより例の如く祭禮を執行ひて諸人の参詣あすつと許し、かハ晝の中より  
庭内の雑沓いはん方もあく夜に入らばまた殊更に賑ひ増り屋敷の者も漫ろ心の浮立て見ふ出  
るゆり茶屋あどへ出て諸人を待遇われは自然と坐敷の人氣すくなく忠左衛門の其妻と二三  
の女中と從へて書院へ出て此景狀を望めをりしが月さへ出景色を増ハ梅が香も暮としと  
て庭下駄を穿て思はず立出さり

第三回

權妻春情を演る庭前の亭  
風雨花火を散す兩國の川

此時忠左衛門の奥方お富の側へ這入一個の女中の從ひゆる跡ある二個の庭内の参詣人の雜

沓と面白しとて眺めとれば主個が立しと毫も知す忠左衛門の慢も書院を出て木立を廻り  
松の許にて賑へるを暫し眺てあたりしがや、草臥しと側へある亭座敷の内に入り此所許の  
人の在すして物靜やかにさし入る月を燈火に座を占て今を盛りと咲乱る、梅花を眺まゆと  
高き香りを愛るも一汐の思ひありとて靜然と其所に足を休めけり夫の措置茲もまたお辰  
の隠居忠堂と共に物見に打登り庭を見下し晝の中より酒宴の相手をあして居しが多く飲し  
に酔の來て胸くるしくも覺えしかハ這を醒さんと其場をハ窺み出て座面の木の間を巡り日  
頃より戀しと思ふ忠左衛門の歩行を月の明りにて疾くも夫と垣間見つ四邊を見れば此外に  
人氣もあらねば節もよし平常思ふ心の丈を明さん物をもと小點頭酒ゆる勝る情慾の遣方さ  
よ其あつより窺もけは忠左衛門の今亭坐敷の中へ入しにお辰のいよく、便りと得たりと思  
ふ物から手持不沙汰お這入りぬれば案じをりしが側を見れば椽側み誰が置捨しか煙草盆の  
有て火さへも入てあれはお辰の是に便りを得つ這を携へて亭坐敷へ入と其や、莞爾に殿様  
是にお出と知と今日お祭りのいろがしさに女中達とてお側にとらず煙艸のお火さへ有まじ



けれど思へば持て参りしと言つゝ其所へ差出すに忠左衛門の片類は笑み誰かと思へば其方  
 の辰能こそ心が附しなれ而して父上にはお物見なるか我此坐敷にゐる事を其方の如何して  
 知たるぞと問へば辰の酒の酔を醒さん爲に庭へ出計らず垣間見参りし由を言にいよく櫛  
 嫌能く我も餘りに庭内の面白氣なる景状ある侍女さへも連すして一個莖等へ立出しが未  
 だ稻荷への参詣せず其方の参詣致せし。ハイお稻荷様への一年足らず日参致して居ます  
 る。ハ、ア夫の強い信心夫に何歎心願の筋でも有て信心致すかと問るゝ言葉の折よしと  
 お辰の目元に情を含み男の顔を秋波に見やりて最と面はゆ氣に昨年お屋敷へ上りしをり此  
 様お方と一夜なりと嬉しい思ひがして見たしと思ひ染しが心の迷ひどい言夫の道からぬ事  
 と思ひて我心に我身で意見をして見きとも断念られぬが凡夫の煩腦神の力を頼より外ふ  
 さいと日参の甲斐さへなくて思ふ人に添で思はぬかん方に此身と任せる愛さ苦勞お察しな  
 されて下さりませと言つゝひたと寄添たる愛ひを含し美人の姿雨を帯たる海棠からす風  
 に臨る漁村の柳髪も衣裳も匂やかに奇南の香り馥郁と梅花に勝りしお辰の戀慕設し普通り

の者ありせば魂ひ有項天外へ飛て心も乱さゆ  
 さ不義の行ひある可さあれども正しき當主の  
 忠左衛門の直つて言葉と更ため汝の酒興か知  
 されども父は仕へる身と以て我に戀慕し不義  
 を爲す人倫の道是より乱れん心附よと言捨て  
 立んとするを懲すまにお辰の裾へ縋線づくに  
 忠左衛門のいよく呆れ父の誤り汝が母を馬  
 足に掛たる故をもて屋敷へ登りて其後の愛翻  
 も殊に勝れたる其大恩も思とせず我を捕へて  
 揺ち舉動餘の者ありせば此儘に捨置奴よのわ  
 らされど父のお愛え愛度汝おひ退くるも物愛  
 ければ今宵の此まゝ免しやらん以後をば急度





つゝしめかしと叱り懲して手をふり拂ひ庭へ下立書院の方へあとおも見ずして行よける跡にも辰の茫然と手も持珠を取れたる心地せられて言葉も暫し彼方を見送りたるが戀も情も知ざりける男も有るよと口の中に一個吻さるるをりお辰さん何處へお出なされしぞ涉隠居さまが召まするお辰さんくと呼立來る侍女の聲に是非なく亭座敷を立出彼方へ至りけりお辰の整中忠左衛門を見榮て戀慕の間に迷へば辛程おは彌増る思ひに隠居忠堂のいよく厭に成行しが其年三月父親の六歳の不圖病に罹り次第くお重りゆき竟よとのあく成たりしが此病中の手當より葬送其他も屋敷の方にく一式すけ持立派に濟せし恩に恩とバ累たれば心あらずも其まゝに月日を送りぬたりしが其年もとや氷無月近く早月の空も残り少く成もて行二十日餘りの日の暑さ全じ月ある廿八日の江戸で名高き兩國の川開きとて打揚る花火の實は一刻千金みる此日をバ待中に大久保家にては年毎に江の邊ある中村樓の二階お登りて見物おせども今年ハ軍船を泛べ見物致さば一汐の眺めあらんと忠堂の言葉を何れも夫を能とし豫て屋敷へ出入の船宿柳橋の柳屋へ家根船三艘詔へ置き川開きの日と

待むたるに早當日も成たれば其日ハ空晴れ風暖き思ふに勝りし日和あれバ何れも支度を爲うちに船宿より家根船を漕て本所の緑町なる屋敷の川岸へと着たるに忠堂お辰忠左衛門夫婦の外に女中若黨仲間までも之れお乗り酒肴を携へ兩國さして漕出たる其日もはや申刻下りの頃にして次第くは近附バ未だ暮やらねど見物の兩國橋の其上お満々として錐を立る餘地さへおさ程立つらねた東西の往來も人におらざる所お殊更西の廣小路此見物に賣んとて氷屋水菓子甘酒屋冷つこいと叫び温かいと喚き所るせきまで露店を並べる其混雜の一方おらず橋下り夥多の船乗り船と船とが押合て氷も見えざる程にてわり日の暮るをバ合圖としてまづ一發の花火を揚れば氷と陸とに山なす見物どつと譽たる其聲ハ川の底へと響渡り是ハ花火の初として第二第三と揚行お辰の隠居忠堂と共に三艘ならびをる中なる船に居たりしが周圍を家根にかこはれて思ふ様にハ見えざるどて暫し先ある仲間や若黨おの乗込る船に移りて打見やれば流星虎の尾さまくの技術を盡せし花火の精妙漫に佳境に入たりしが夏の空とて定めなく一天俄にかき曇り今迄落やしつるかと疑ひたり



ける星の數も忽地隠れて影もといめず颯と吹出す東風と共に降出を大雨の篠を束ねて投るが如きに陸の見物なと計りに驚き怖れ濡たるまゝ、東西南北己がまふく、駈出し之れ其上を渡する者に踏据られ川に、夥多の船の中ある人の大さに驚き、船頭をげまし漕去んとする物ながら彌が上に、鞍り來りし事をいれ、我勝にと争ふ依り度を決ひて船と船とを打合せて、悶着あしけり

第四回

暗夜の船中に悪縁初て結ぶ  
陸壇の山上に行女亦に死す

一年一度の物日と稱する雨國川の大花火人出盛りし其節に此大雨の事され、客を見當のうろろ船陸芝居さへ跡とせず、浪敗あして漕離る、中にお辰が乗てをりし船の若黨仲間の多きが故、夫と見るよりみち忠堂と忠左衛門が船へ飛乗介抱すれば、お辰も夫へ乗んとする内、お疾くも船と船とがすれ違ひ行、其の中を外ある船に隔られ、忽地互ひに漕分れ雨のますく降しきり、今迄水陸異畫の如き灯火の消て、眞の闇目さしも、知ぬ程とぞ成しにお辰の頻りあ氣

を揉とる船頭と言ひ其所か此所かと探さすれども是さへも方角失ひ困じけり、登時お辰と諸共に先ある船へ乗おくれし仲間の角藏の、艦の方より出來り、モ、お辰様夫程にお騒ぎあつても此雨にて暗さの暗し、皆様のお船の中々目附るまじ思ふに、大方柳屋へお歸りあつてお仕度をなされてお出で座りませうと言ひ、お辰の船の中ある提燈の火でつく、見えて誰かと思へば、仲間の和主の角藏で有たるか、原來和主も吾儕と全く那處のお船へ乗遅れしか成程、和主のいふ通り柳屋へゆきお仕度でもなされてゐるかも知ぬ、お辰も角藏所へ歸つて見やうと言ひ、角藏點頭て、い吾儕も仲間たちよ遅れてお船へ行くくあつたの面目次第も座りませぬが、今と成ての貴下お一個此真暗さ川中にお置やすも何とやら遅れて居つたが幸ひゆる是より直に柳屋へと信實立ていひ、船頭に差圖となして橋間を潜らせ船のやうく、柳橋の裏川岸へどて着しころの雨さへ節よく、露渡り星の光りも見ゆるに、ぞお辰の角藏諸共に船より登りて柳屋へ至れば、女房走り出思ひぬ、雨にて節角の花火を敢して仕舞、まして、賑ひ困りて座りませう然して諸君もお後からと言ひ、お辰の此方の家へお歸りあらんと思ひしゆる尋て參



りいしましたが夫でい茲へいお歸りがと言ハ  
 女房かい取て然いふ譯あら只今にもお出が有  
 らうも知ませねバマアお二階へお登り遊ハせ  
 見れハお召も濡たる容子夫を召てハお身の毒  
 ゆゑ暫しありともお召代をと待丁ハ斯る家業  
 じて行届いたる其言葉に推辞もならねハ柳屋  
 の二階へ登りて帷子を脱のへ沙干其中ハ角藏  
 もまた下座敷で濡たる單と干たるあとするう  
 ち二艘の船の船頭ハ空船漕で歸り來り殿様に  
 も又ハ隠居様も此方へお寄ささらすして兩  
 國川を横へ切れ縁町あるお屋敷へ直お歸り  
 奇さおましたが後一艘が見えぬのでお辰ハ大



方夫に居らうが設も一同の歸りを待ち船宿にでも居る事あらバ早々歸る來るやう迎ハの者  
 も遣したたれと見れハ仲間角藏も此船の中にとらざれば大方是もお辰の船にと思ハハ渠を  
 伴ふやうにと傍隠居さまの仰ありと言ハ女房心得て此由斯と取次にお辰ハ原來此方と思ハ  
 過して此家へ來れと皆様のもうお屋敷へ直お歸りおされたか夫でハ吾儕も些も早く歸り  
 ませうと女房に世話に成たる禮を述べ角藏にも又此よしを言て浴衣を脱捨て帷子を着て立  
 出れハ女房心得一艘の家根船をこしらへ置き中にハ酒と淡白せし下物を入れて置たるハ途  
 中の徒然を慰むる注意とこそい知れたりお辰ハ船へ乗移り角藏ハまた船の間に這入て岸を  
 離れつハは機嫌ようとお女房が棧橋までも送り來て言る世辞さへ鳥羽玉の夜風に吹せ船頭が  
 棧さへ早晚機と代り兩國川へと漕出しぬ其夜の未だ更行す初夜過たりし頃あるれども雨にて  
 人をバ散せしかバ川さへ陸さへ影もあくいと淋敷も思ふをりお辰ハ單り胴の間に酒傾け  
 しが酔出てハ敵手欲くも成行しお見れハ仲間角藏ハ船の間にゐて黙然と爲るるは依り是を  
 呼び其所ハ夜露を防ぐ家根もく身の毒お辰ハ此方へ這入吾儕も幸ひお酒をハ開てハれば暑



氣拂ひに和主も一個呑がよいと言とも左右さく進み得ず有難ふの座りやすれど外に人な  
 き船の中貴下のお側へ参つていと旨をお辰が打消て他に人でもゐたならバ悪いか知ねど此  
 外も人があければ遠慮もあいとすマア〜此方へ來がい〜と手を取無理に引入て酒の相手  
 とさせるが提燈の火につく〜と此角藏の顔を見れば年齢の二十二三眼するどく鼻高く  
 唇る赤く色白く是の一個の美男子なれば辰の早晩見惚つ〜平常一つお屋敷にゐれども  
 此方の興勤め彼方のお表仲間の軽き身分の事すればお庭掃除のその折にたま〜見る耳に  
 して顔さへつく〜見し事あければ好男子とも思ひざりしが今宵二個のさし向ひ見れば見  
 るほど爰然した男らしいと言バえに言ねと男も心一つ平常興に座すゆゑ能女どり思へど  
 も之や好と思ひざりしが成程是ならは隠居様が現を扱すも無理のないと是も見惚て双  
 方が茫然としてゐたるをり颯と吹來る川風の烈き夜風お提燈の點火の消て裏の闇二人の困  
 じ船頭の附木を探して煙艸盆の火にさし寄れど最前の雨お漏りて附されバ依ん所さく東  
 る岸お漕附け舫おきツイ近間あるお船藏の前の町家で灯火をバ借て來ませバ少しの内と提

燈携て棧橋を登り行たる其めこの如法闇夜の船の中思ひ思ひれ其上る酒氣を帯たる二個の  
 男女實に之れ色の煤灼てふ酒が取持轉び察に怪しき夢を結びけるや〜有て兩個の前かい繕  
 ひ居直りて互ひに汗を拭ひつ〜女の乱れし髪を毛を手探りながら搔上て顔見合して莞爾と  
 笑ひし節に船頭やうやく灯火と點して返りさぞお待遠では座りしあらんと元の如くに提  
 燈を下て舫の綱を解き又漕出せば角藏とお辰の素知の顔をさし四方八方ごとの世間話しを  
 爲つ〜行不船ははや緑町へと着しかバ其所より登り何くはぬ面色あして屋敷へ歸り奥と  
 表へ別れしかバ知者絶てなかりけり开も此仲間角藏が素生を如何と尋るゑ是の東海道遠江  
 國薩埴郡の麓村百姓時右衛門の養子あして本名を時松といひ綽名を不知親といふ博奕打  
 が世を忍ぶ假の仲間にて如何れば是を不知親といふよ今年を距る二十三年前天保十三年の  
 十月すゑ時右衛門が峠の上を通り掛れば木立の間お頼りと赤子の泣聲するにぞ不審ながら  
 も立寄て見れば無残や旅人と覺しき女が其所に〜殺され側に赤子が泣ゐるふぞ驚きあがら  
 も不便お思ひ其子と抱上此由と上へ訴へ女の死骸を葬りやりて赤子をバ養ひ取て時松と名



附たりける後の話しの次回も委敷解分可し

### 第五回

恨を隠て毒婦兇漢を誘ふ  
酒を試て小人不義に與す

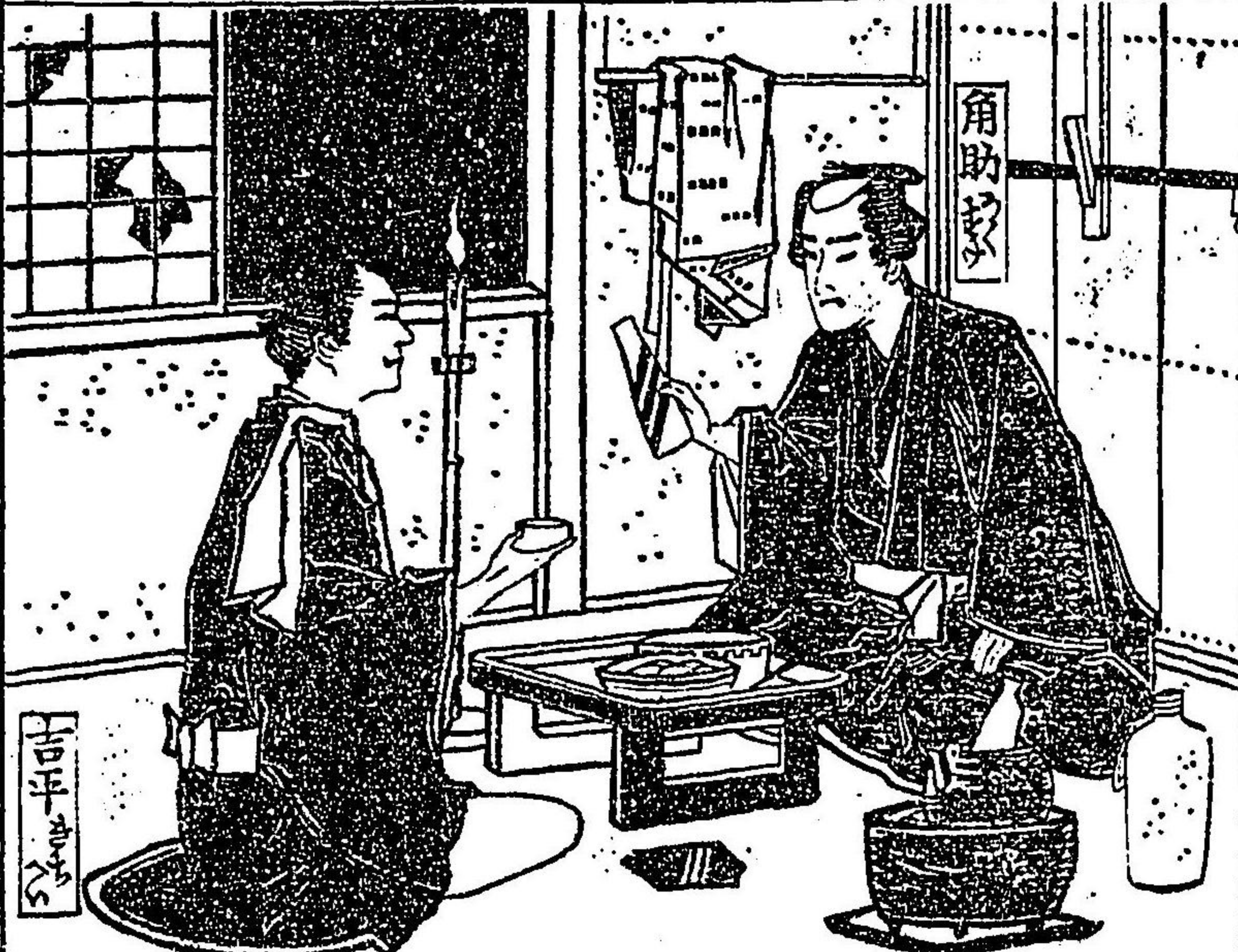
却説時右衛門の小兒を拾ひ上しをり後の証証の無からずやと其母親が脊負上の守袋の中なぞ探るる臍の帯の包みありて天保十三年正月元日と計り記しあり親の名も更なり小兒の名もへも記してあらねば外も便りとする物あければ是ぞ此兒が臍の緒あらんと思へば其まゝに秘置しが育に從ひ時松の心曲けて養父母の言葉も毫も用ゐる事なく年十四五の頃よりして博徒の群に混り入り賭録ををし酒と呑み悪友に誘れ宿場へゆき飯盛などを買散し喧嘩といへば人々先立暴乱あるくも双親の意見をすれども聞色なければ時右衛門夫婦のものに是れを病み頼ひ附き打續きて死没たるにぞ時松の結句心安しと懸嘆色に有すして田畑も他人に賣渡し其金のみ酒色の爲に遣ひ捨つゝ得たり顔あますゝ自儘に舉動ければ里人のみな疫病神はと恐れて是を不知親の時松とこそ諱名あしけり是れ道れ薩陞の一難

所に親落れども子の知す子の落れども親の知さる難所のありて世の人の是首をば差て不知親不知子とあん言ひへたる夫が危険の場所と等く時松が身の行ひも舉動浮雲其上を親を離れども知ざる者もある彼是言葉を混交して不知親とい名稱ある可し去程に時松が悪事すゝ増長もし同村の百姓何某が娘を思ひを掛種々にかき口説きたみをも以て思ひの丈を知らせんとせしこと有れども素より物堅き家の娘といひ時松の能からぬ者と常も他人もいひ我も知れば返事もやらすかき口説は差しめてさへやりたるお時松の大きに怒り斯て可愛さ餘つて憎さが百倍とやらん汝我をば嫌ひたる恨みの程を知らせんとて或夜窃に其家へ忍びて娘の闔房へ窺ひ聲立ぬやう猿轡を口を喰せて擔ぎ出し脊戸へ伴ひ木立の中にて思ふがまゝに強姦遂げ充分情慾果しゝすゑ其場に置いて指殺し夫より直に逐轉あし江戸へ出しが悪事ある其身の町家に置かねつ傳を求めて大久保家へ仲間奉公に住込て名さへ角藏と更めて實直らしく働る物からをりゝ屋敷の物を盗み賣却して酒代へ又の女に戯るゝ行ひあれども立働さど老實しくも爲もあるに心附もの有ざりけり斯る中にも角藏の隠居忠堂の妻あるお辰が



他人の勝れたる容色あるに心迷ひ胸を焦して閑あらば言寄んとこそ思へども我身の賤き仲間にて近附ことさへ就ねば如何のせんと思ひ腦し折に幸ひ兩國の花火の時に思ひきや仲間共の乗込る船へお辰の移り来て花火を見るこそ天の賜物言寄よすがあれしと考ふるうち雨降出しにみち殿様のゐる船へ仲間共の飛乗る中角藏のたゞお辰一個に眼を附けるればお辰と等く乗遅れしを幸ひと甲斐くしくも持遇てまづ柳屋へ立歸らせ再度船をば出させし途中において戀しと思ふお辰の方より寄添れ優しき言葉を掛られたるに流石の男も夢かど計り轟く胸を押鎮め提燈の消え船頭の居らぬと能と手枕と交して黒白さき契りをしたり是より後又角藏とお辰の首尾を計らひてをりく忍び會はども淫好其氣の通せし物にや互ひは捨難死思ひありて一夜を千夜と契る物から情慾いよく遣方あく如何もして思ふがまゝお爲んどすれども及ぶに難くお辰の夫に附て思へば主個の大久保忠左衛門に戀慕あしゝに聞れずして反つて羞を興へられたる此遺恨をば晴しゝ上屋敷を已れが自由お爲んと思へば急地一計と胸に定めて角藏の會たるをりに告るやう二個斯して何迄あるとも添る

る譯に非して果の互の罪あらはれ追出されん目目前あり然とて茲を立退て手鍋携るも世に唄ふ歌に等く好た同士添添るとも貧に迫り甲斐さき業お成ぬ可し就ての當主忠左衛門を亡き者とせば未だ世嗣の子さきが上に奥方のお富の年の若きもる離縁と成て里へ返らん然れば隠居忠堂どのが再度家督に直るの必定その時こそお香儂の奥様隠居の業より手の中に在るも全き物おれは如何ともしなして和郎をば取上手許へ遣ふやうにあして其上隠居とばかり物とせば大久保の家のお和郎と香儂のものは如何の有ますと恨と隠して夫とさく吹込





毒氣の女は似氣なき大悪心に角藏も一時の大きに驚きしが惡に根強き悪棍の篤り聞て片  
頬に笑み成程深く考ふれば此上もまさお主が上策如何も當主忠左衛門を亡き者おして此家  
を兩個が自まゝにするの能からんハテ如何があして殿をバと暫し思案に暮たるが急地思  
ひ附こどゆりてや頼りに點頭此方に向ひ殿の性來茶を好めばとりく淺草山谷ある茶師宗  
達の許へ招がれ忍びて参り夜を籠て歸り來るさへ多くあり其節ごとく仲間の吉平男に若黨  
の三三郎の連行ば彼吉平が平常より酒の好こそ幸ひあれば酒より彼を味方に誘ひ更て歸  
るを多田藥師の門前ゆたりに待受て渠に若黨の邪魔を拂ひせ吾儕の直に忠左衛門をと言聲  
高しとお辰の止め然ども下郎の口善惡あしと世の俚諺にも言通り減多な事して悟られるバ  
反つて兩個が身の大事。夫を和女お教ゆる可きや彼の吉平も素を糺せば上州わたりの博奕  
打然やと間拔な事もなすまじマア担任して置がいゝと猶行末の相談もどあすをり秋の夜あ  
がらもはや明近く八聲の鶏の告るに二個の驚きて其まゝ分れ角藏の己が臥房へ歸りけり後  
のをりく吉平の心を探るに大事をば漏す可きやう見えざるゆる角藏心に喜びて節があわ

れと親ふうち其年もはや神無月の末と成行寒さ烈しく雪さへ頻りと降出せし其夜の部屋  
仲間皆共の酒を飲み出しが吉平獨り博奕お負け酒買ふ錢もあらざるや部屋の片隅に  
かいまりとり又角藏の今宵こそ雪を幸ひお辰の部屋へ忍び行んと思ふより是さへ部屋に  
然と考へるはか他人もまさお序よしと吉平は向ひて角藏言るやう冬の初といひあがら  
思ひ依ねへ今夜の雪貴様も嘘かし寒からう吾儕も餘り寒いから飲ふと思つて買て於た酒が  
あるゆる酒をして一杯やらうと徳利を取出し棚の隅よりして惣物あるか干物あるか包たり  
ける竹の皮を開きて出す肴を焼き酒を試み茶碗につきイザと計りにすゝむるよ酒を聞て  
の目のまら吉平咽喉を鳴してうち喜び頻ふかたふけ居たりけり

第六回

掛茶屋に於村病に苦む  
石原橋に吉平慢に語る

君子だも其道と以てせば計る事を得る物あれば況してや利に走る小人をや好む所の物を與  
へて勝つ時計る易く中にも酒色を以てすれば謀ることいよく易かり却説角藏の全

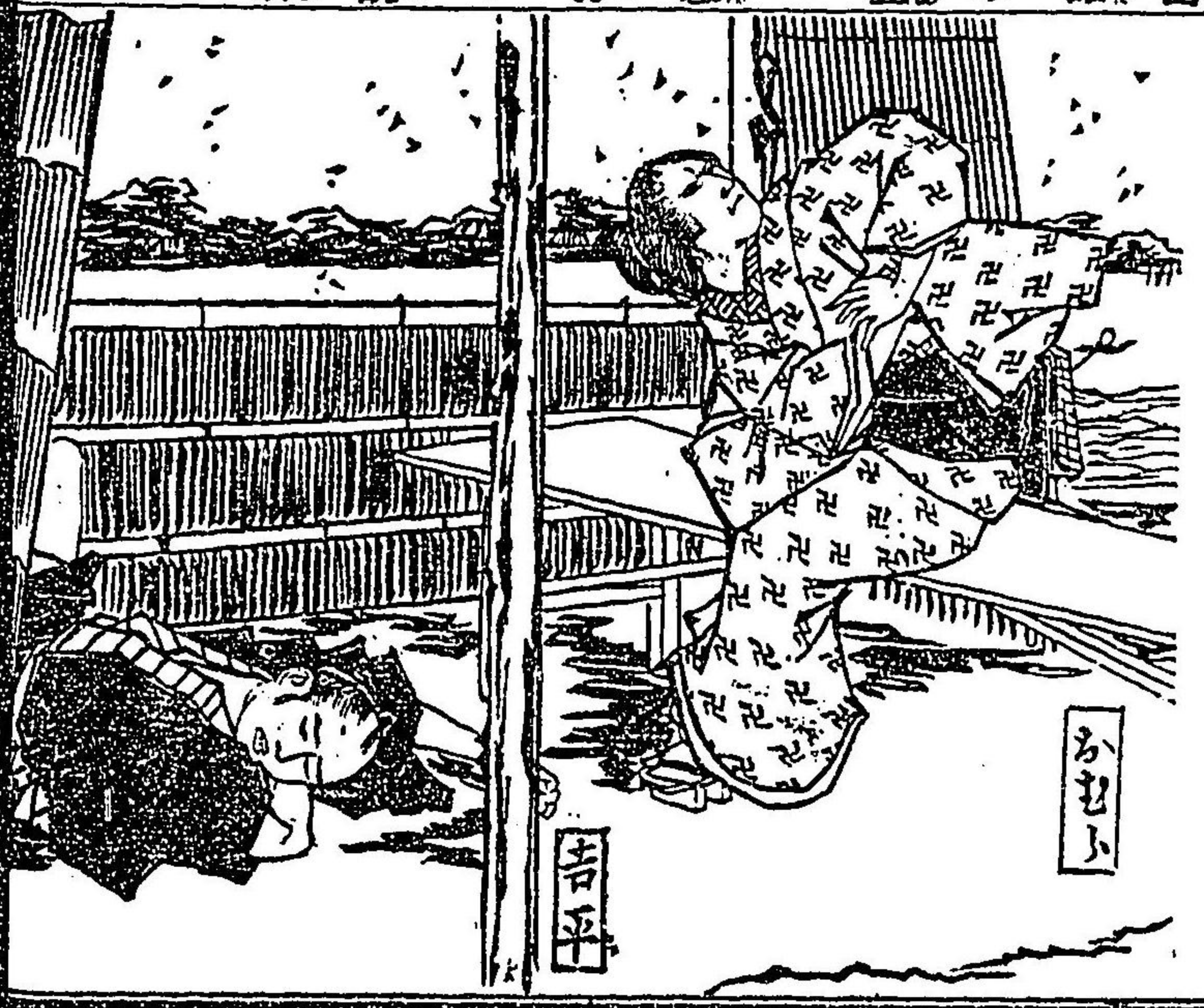


仲間の吉平が酒を好むを僥倖とし豫て貯ふ酒を出して頼りに是を翻るにぞ寒夜も忘るゝ  
 計りなりと打喜びて傾くる四邊に人のあらざるを角藏わざと嘆言がましく富貴其身も餘  
 る人の雪の降のを反つて好し樂みを増す酒宴をも開いて是とば稱すれども我々風精の一  
 合の酒さへ中々自由は香す今夜も奥でいひ隠居さまが雪見の酒でも始つたか面白さうあ  
 アノ三味線どうか一生お一遍の斯いふ身体お成て見てへと言はば吉平も長息吐き吾儕も生れ  
 の上州の絹商個の息子あれと双親ともに早く死だを身の僥倖と夫から後の勝手氣儘に遊び  
 狂ひ身代さへも遣ひ潰し今仲間と落魄てい昔し戀しき榮花の夢果てり果敢ない人の身の上  
 老少不定の世の中ゆゑ勝手次第を甘く此世を過してへナアと思ひ演たる述懐  
 をつくづく聞たる角藏が行燈の灯に吉平の顔を望んで小點頭それじやア吉平お主もまた榮  
 花がしてへと言のたナ。夫やア吾儕ばかりに限りやアしねへ誰でも同じ身の望み。どの言  
 こんな仲間ゆる理道を事での中々出来ねとお主の譬へ道あらねへ事でも榮花がして見てへ  
 か。角藏義兄にも合似ねへ長い浮世に短い生命金も成とか言目が出るとか言ことあらば隨

分と太く短く何なりと爲先へ物でも有めへのさ。オ、頼母しい其許の意それと毫も偽りね  
 へか。外の者すら知ぬこと常日頃から兄弟のやうにしてゐる兩個の中殊に平常此吾儕に  
 目と掛酒も飲して呉るる主に何で外飾かざりを首て如何する物で有う深く聞のりお主の馬  
 鹿念そんち餘計な事い癪て儲り口でも有あらば半分乘てい呉まいかと思ひ込だる吉平の容  
 子に此方へ便りを得て念に念を入れて聞たも他人に言れぬ大事の話し首尾よく行ば和主  
 も吾儕も武士に成り榮耀榮花が出来る事もある夫で念とば入たのさ。オ、夫でい然いふ甘い  
 口が。如何もあるが其手初いと首つゝ聲を一層締めお主の殿の供をして山谷へ度々行さう  
 だが其歸り道此吾儕に助太刀として邪魔と拂ひ殿をば首尾よく討してくれ。エ。其様に驚く  
 事いねへ其譯といふの如此とお辰が話せし一伍一什と話せば吉平呑込で夫でやうく仔細  
 が譯つた外の奴等い誦めへが吾儕の酒をば香で察するゆゑをりく夜中に目が覺て見ればお  
 主の部屋にゐず雪院なるかと思へとも然でもあいのので不審く思ひつゝ何の間にか彼上  
 物が手に入て夫はとまで謀つたか全に仲間仲間でも常から尖い和主あれと然やで首く



行めへと思つたに似ぬ大とたらし此方も出  
 世の小口ゆる首尾よく殿をばやらせやうと語  
 るをりから忽地に町へ酒をば飲に出たる餘の  
 仲間の歸り来る足音あすむを兩個の話しを止  
 て何氣なき面地あして其夜を過し借夫よりの  
 忍びくに竊に語らひ窺ふうち忠左衛門の寒  
 氣に犯され少く風と引たりとて宗漢方へ打  
 絶て久しく行もせざりけるに角藏お辰の意の  
 中にもどかしとこそ思ひけれ案下某生再説  
 お辰の母の娘の出世に喜ぶ間もあく本夫に別  
 れ泪の更の干らねども屋敷の蔭にて訪ひ吊ひ  
 も立派に躰せし其後の自分一個の樂隠居これ



も娘が有るゆゑと言ども屋敷の御隠居さまの御恩と朝暮思ひつゞけ其年もはや十一月の初  
 と成しに例年に増し寒氣も強く雪さへもしばく降るお屋敷の御隠居さまも恙なきや參つ  
 て侈機嫌伺はんと思へど雪お妨げられ其日々に過ししが雪のやうく晴渡り道も少しの  
 片附し容子にお村の今のうち未刻すぎなれども遅くあらば娘が所るで泊つて來んと一個住  
 居の氣安さの錠を卸して小梅を出兩國へゆき土産物を求て行んと大川端へ出て南へ道を取  
 り多田の藥師の門前まで來りたるころ空曇り又霏々と降出す日和の癖か雪もよひ陸噴をり  
 悪しとお村の吻さ此所等ハ傘を借る可き家さへ無ければ兩國まで急げど生憎猶降り出し  
 石原橋まで來りし頃己に一面白雪に道を埋れて寒氣も烈く持病の癢さへ起り來て今の一  
 歩も歩行難く見れば側に空茶店のありて幸ひ家根もあり又取附たる床机もあるの今まで見  
 世を出てとりしが雪を恐れて仕舞て行しか暫く茲まで休まんとやうく這入る我に先立仲  
 間体の一個の男泥の如くに酒に酔ひ土間に倒れて高軒心地能げぬを寐てをるをばお村の打  
 見て驚きしが我身の病に問問のきければ側の床机に腰を掛け葎簀に雪吹を防ぎつゝ懐中お



したる合薬と出して飲て休ふに暫くあして癩納まり心地能くこそ成たるにホツと一息つく  
づくも側と見れば仲間未だ寐てゐる物の此雪の日も上衣一枚着たる儘にて過すゆゑ寒  
さも知でゐる可けれど酒ゆゑ茲等も寐てゐるら身体の毒にも成可きと思ひ續けて不圖見た  
る上衣の印の上り藤九十九久保に百本多と世も言はやして本多も大久保家と本多家の夥  
多あるゆゑ上り藤の印も殊に多くして何處の人か知されど此邊ゆゑに設し萬一屋敷の方  
で有りまいかと思へば起る測隠の心の反つて悲を増端ありと神をあらぬお村の争で氣の  
附可き側へ立寄すしくと揺起せども他哩あくコレ〜悪戯と致するお役人も同様吉平  
様に無禮とすると巳等の首が飛で仕舞ぞといふ事さへも夢現呂律も廻らぬ酒の酔物いふ毎  
に出る息の樽脱立の柿に等く臭さの言ん方もあければお村のあはも揺動し貫下の借ど  
町の大久保様の仲間衆と思ひますのでお起しやすが茲に在ていお身の毒ゆる。ナンダ仲間  
仲間と澤山さうに言ふ所見えても今にもお殿様へ斬して仕舞は隠居忠堂のお辰さんのお  
手の物然すればお辰さんと角藏が大久保家の殿様奥様吾儕の三千石の用人その前祝ひに

飲だのだと酒が言そる悪事の秘密眼さへも開かず饒舌立て寐返りをして又更に高軒ある爲  
休お村の聞たる今の一言いよく屋敷の仲間又相違さうへ仔細の知ねと娘お辰が角藏と  
いふ者と計り殿を殺して大久保家を奪へんといふ空怖しき謀みあるやに聞えたり這い開も  
如何と呆れ果て暫し言葉も出ざりけり

第七回

養母自盡して娘兒を説く  
君侯視察して家謀に托す

天に口おく人を以て言しむるとい宜あるかお辰角藏がさしも根強く謀みし事も一味おす  
吉平が使の戻り朋友に會ひ兩國の居酒屋へ入り大い又過し歸る途中の降る雪に思ひの外に  
酔出て暫しも溜らず石原橋の傍の空茶屋へ轉げ入り熟睡をさせし其所をお辰の母に起され  
しも夢か現か知されど大望成就の其後の武士と想へば我知す酒お性根の乱れゆき不圖大專  
と饒舌しかり斯と打聞くお村の驚き猶も容子と探らんと現を幸ひ種々問は此方の夢の中  
お辰角藏が中の素より兩個竝に牒し合せ殿忠左衛門を亡者とし奥方お富を離縁させ大



久保家をバ奪いんと語る悪事の一伍一什を語るに聞てお村のいよく其驚きの一方向らず如何のせんと呆れはて暫し途方に暮るたるが幸ひ雪も降止たき屋敷へ至りて娘も會ひ意見となして悪心を翻へさせんと思ひ定め高軒して眠りぬる吉平を其所へ捨置心も空に縁町の屋敷へ行し其日さへはや暮かゝる王魔が時入相告る鐘の音も諸行無常と響るお村の屋敷のお辰の部屋へ通りて娘の何れへと問バ女中の先程より奥でお酒の初りをり其所にお出で座りませればお呼申して参りませうと灯火を點し茶を勧め開のしげに出行しが暫く有てお辰の來りも隠居さまの酒のお相手毫も傍が離れられねバ大さお遅く成ましたが此雪道にわざととお出の急の用にてお出來ての事か何の然れお夜陰前にてお坐さんにどれば臆をど立掛るとお村の急に押しめイヤく何も欲くのあられ其心配に及バぬ事と止てお辰の顔つくく見やりて涙を目に浮べればお辰の不審と膝すり寄せ心の濟ぬお前の顔附さモシ氣合でもと半分聞すお村の四邊と見返るよ幸ひ人氣も有されバ耐々し溜涙わつと計りに聲立しが必附ての嘆を止め氣合も悪う成らはず自分の娘が大それた不義を働き殿様を

殺して是かお家をバ奪いんといふ悪謀聞ての肝も潰る、計りか空恐敷大罪人とされてお辰の我身の上を如何して母がと得了の毒婦もさち驚きしが音高しと母と止めて夫のまた如何ある事と聞はつりて人聞悪き其様あと言バお村のいよく泣き聲慄して吐しをるお今日お屋敷へ來る途中躑と雪とお閉られて石原橋ある空茶屋へ這入て暫く休ふうち酒又酔たる吉平が現に語りし悪事のだんく始の斯々云にて後には箇様くまで聽らば聞て家へも歸らず直其所より來りしなり是でも母が偽りかど説破の言葉に計りたる事の残らず吉平





の口より母に言れしりと心附ての只管に呆るゝの外所作もなく黙然としてゐたりけり母の  
 此方に膝と進め何の言て聞せやうと思へど夫と明しむる心に隔の出やうかと言すにわたの  
 が吾儕の過失實と言はるゝ和女の吾儕等夫婦が實子にほらず和女が二歳の其秋に小梅  
 の外れ切の邊に捨て有たの父御が拾ひ育しにて其節和女の母といふ川へ身を投死た  
 るが岸よ残せし一足の下駄の外よの物もあく肌につけ附たる臍の緒書いコレ此通りと脊負守り  
 の中より出してお辰に示し然すれば是より心を改産の母御の菩提のため又の養父の後の  
 世を吊ひ慈善を施してと初て明す其身の素生聞て驚き臍の緒書を見れば由兵衛娘と耳よて  
 外に何も記さるにぞ親を知可きすがもあければ今更心を改めるも甲斐なき事と嘲  
 笑ひ謀の次第を残らずもお前に知れし上からの今も包も詮あければ如何も話して仕舞やす  
 が吾儕も何まで他人の妾に成て一生暮すの否も茲の殿様よ臍を据て臍を据て追出させ  
 て隠居さんを亡き者にして奥様お成て屋敷と自由にしやうと今年二月初午の夜宮に庭の  
 亭坐敷で心の丈を口説ても情知らず午の日だけピンと反られ恥をかき可愛さ餘つて増憎

さ花火のをりみ角藏さんと不圖して事から馴染て殿を殺して斯めといふのも吾儕一個し  
 て樂をしやうといふ譯ならず係りや繋るお前まで樂が出来るといふ物ゆる義理ある子母と  
 猶のこと黙止て望んでお出さら此大久保家と手に握つた上如何とも吾儕がしてお置る  
 みにして上とすと悪い根強く自若として演しにわ村の我娘の顔打守る耳ありしが何思ひ  
 けん側あるお辰の懐剣取るより早く振手も見せず咽喉元深く岸破と突立アツと叫び聲と倒  
 れし急所の重傷お辰の嗟嘆と立寄て抱き起して何故に此自害をと言ながら聲や漏んど窺へ  
 ど間隔てし此一間日の全く暮はて、奥の酒宴に物さわがしく皆其席に侍りて其所等に  
 人氣の有ざるに毫の心落居つゝお辰の顔に介抱すればお村の苦しさ息と吐き吾儕の自害を  
 夫程まで驚か思ふ物なりせば改心あして大恩ある御隠居さまお仕へやし母が冥途の苦を  
 救ふてと言も苦しさ息の中見るまに顔の色變り刃と抜へ進しる血汐の紅のあへなくもお村  
 のがつくり落入たり案下某生再説大久保の用人田上金吾の愛妾お辰が此頃の舉動いどく  
 心得難くと思ふ折うら忠左衛門が筋よ金吾を呼寄てお辰の部屋お時として、男の聲なぞす



る由を口としたまき女中どもの中にい言る物もあれと開い何事をか聞候めし物もや有んと思ふがゆゑ敢て心に止ざりしが噂のますく高きより思ひ出せば今年の二月我お對して云いふ舉動ありしが現在の父の妾で有ながら我に不義を仕掛る女他にまた情夫をこしらへぬどの受合難き事あれバ汝筋にお辰が上を探りて夫と知事あらバ父の耳へ入すして我お知せて隠便に取計ふやう必掛よと私語告れば金吾もまたお辰どの、上のしも吾儕も日頃不審と抱き専ら心を用しが貴下へ對して其様を淫かわしき品行ありしら夫是以て考ふるに女中が致す噂あどの相違あしと思われ如何も仰に從ひて篤と實否を糺せしうへと主従交に筋き語り立別れしを離ありて知者更になかりけり斯て其後田上金吾のますく心を  
用るうち霜月上旬上へ出は機嫌伺ひ椽側を巡りて下る其節に雪さへ強く降出せし庭を望  
て通り掛るをりに側の手洗鉢の邊お何やら書物の落て居しと心ともあく認て筋と拾ひ取り  
袂へ押入立歸り吾儕の部屋にてひらき見れば人より他人へおくりたる消息の破れし物あり  
けり開も此品の如何ある物を次回に至りて詳細あるべし

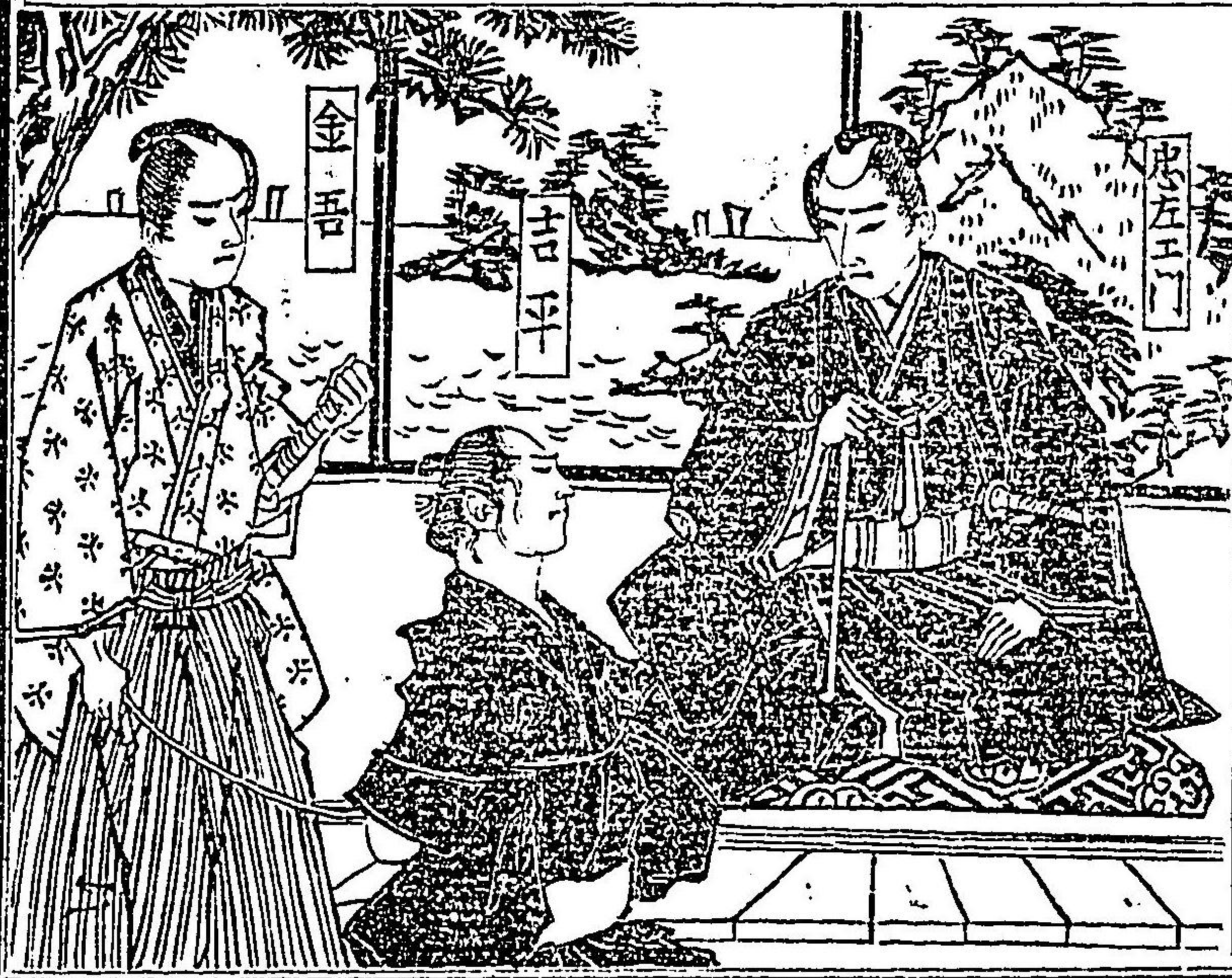
第八回

殿の面前に責罪の咎  
妾の部屋に捕物の勢

部屋に這入し田上金吾の拾し消息の破れを見るに「来る十三日の殿山谷へお出のよし吉平  
やしい間其節に本望と遂げい心得よひ日月角藏よりお辰どの」と讀下して大きに驚き本望  
どの何事あるか知されと仲間角藏が愛妾のお辰どのの斯る消息と送るといよいよ以て不  
審しと开を携へて直にまた奥に至りて忠左衛門お筋に見せて仔細を話せば忠左衛門の横手  
と打ちお辰に密夫の有よしを女中どもが言ひへるは是ある角藏が尋なるべし何の然れ吉平  
先を糺さバ委敷事の知んといふに金吾の心得て先づ外の仲間を呼び吉平を尋るやと尋るに渠  
の今朝ほど兩國までお使お出たるが何まで立ども歸り來す其中外の部屋の者が二個連立石  
原川岸まで用事が有て参りせすと橋の袂の空茶屋の中に渠奴の泥の如く酔て眠りてをり  
ますので搦いで返り部屋の中に今い寐かして居坐りまをと言ひ實に序よしと思ふ物から金  
吾の點頭渠に有ねバ成ぬ用ゆる酔てをりても大事きなれば其儘引連奥庭へ参ると言に仲間



心得立しが間もさく吉平を肩に掛庭へ來れ  
 夫で能と仲間を立せやり切戸を締て下緒を  
 外し正躰もさき吉平を高手小手に捕縛つゝ椽  
 側近く引据て此旨斯と言上せし忠左衛門の  
 他人を拂ひ端近く出座を占たり登時金吾の吉  
 平の脊中を撞と強く打ち君の眼前を眼を覺せ  
 と言聲耳み入たれバ吉平眼と開き見るも其身  
 の縛られ御前に在り且用人の田上金吾が附添  
 るるにぞ大きに驚き醉さへ醒て茫然たり金吾  
 の吉平に打向ひ消息の中の山谷といひ大望と  
 いふ藤々と頻りと糾問したりしが兎や角言と  
 毫も言ねバ忠左衛門の端と白眼汝何程陳せる



ともお辰角藏の己よはや白状さしに誰が爲に何まで陰しをる事を設し言ざれば詮方さし  
 火水を以て言せんとする添より田上のみまた細をバグツと締上れば苦痛に耐ず吉平が兩個の  
 己に白状せしと有ば今更包とも甲斐さき事もある上ん夫ある仔細の箇様くとお辰角藏  
 が不義の事より深き根ざしの悪事とバ残らず白状したりしに初々聞たる忠左衛門金吾も共  
 に打驚さしが其まゝ渠を庭面の松の根方へ縛り置き兩個の奥へ這入つゝお辰角藏の兩人を  
 捕へて罪を糺さんと其相談を爲うち冬の日早て暮初けり茲よまた角藏の屋敷の前の雪を  
 拂ひ部屋へ歸るに何用があるか知ねと御用人が吉平に限るとて酔てる者も無理やりに奥の  
 お庭へ連込したがどうする事かと仲間どもが言わへるを聞不審を起し切戸の下より潜り入  
 り垣の小蔭に身を寄て窺ひ聞バ吉平の口より悪事の顛末が露れし未兩個の奥へ入し此身  
 の上お辰が上も覺束さしと日の暮しをバ僥倖に其所より奥へ忍び入りお辰の部屋をバ窺ふ  
 に中に母のお村が來り石原橋の笠舎り現に饒舌し吉平が話しを言て娘の素生を明して頻  
 り意見をしたれとお辰の毫も肯ざるより竟にお村が自害せしまで一伍一什と立聞しに一度



の大きに驚死しがお辰が無事よてゐると喜び障子を開いてすゝと這入お辰の誰ぞと驚き見れば角藏なるに少し落居如何して茲へと打問へ密書を殿の手に拾ひれ今日奥庭めて云々と吉平の事を言葉せわしく話して斯て此所ろに少時も猶豫の成難し三十六計走るを以て上策どこそ為可けれど告るにお辰もいよく驚き帯締直し有り合ふ金を互ふ別て懐中にし出んとする時廊下の方に人音あして障子を開哄と喚し大勢の仲間原の込入んとあし、物から血に染りしお村の死骸の臥てゐるにぞ是に恐れて進み得ず角藏お辰の何事と思ひたりしが正しく是吾儕兩個と召捕の者と思へば今更に覺悟をなし、其をりから仲間原の脊後より田上金吾の顔れ出で不義を働く耳あらずお家と狙ふ大悪人ソレ仲間ども死骸に恐れず渠等と取て押へよと魁と言葉に心得りど一同掛れば此方の二個の脱れぬ所ろと暫しが間だ争ふ中に行燈を踏返して、眞の闇黒白も分らず成しかば是幸ひと兩人の多勢の中と摺抜て庭へ飛び下り逃行くにぞ夫れ脱すまど田上の指揮心得たりと仲間ばらあど追掛れば角藏の庭の隅ある塀板へ手と掛引に雨露は晒され釘の弛むたるか苦もあく一枚剝れしよぞ其所より兩

個邸外へ出れば跡ある者も其所より出間なく追れて雪道を倒つ轉びつやうくと相生町をも通り抜け二個二つ目の橋の上へ掛りしをり己にぞや逗留らるゝ事となりしにお辰も今の絶体絶命身を跳せて欄干より水入と川へ飛込だるに嗟嘆と計り角藏が騒げど追手に迫られて詮方なければ多勢と敵手も闘争あがら一方を開いてお辰を助る氣か是さへ身をバ跳らせて川へ水入の飛入たり物語兩枝も分る茲の土地も飯倉の四辻近き二丁目に紺の暖簾に白く抜く伊勢屋と言ふ呉服店建つゝさたる土庫の奥の坐敷の夫婦の居間主個の年も五十ふ近き消光も最ぞ安兵衛か女房お茂世と今年二八の娘お峯を近く招き此間から話す通り和女も最早十六ゆゑ間違事のない中よ婿を取うと心配しよと長し短し良縁がよい耳ならず店あゐる惣三郎の今年十九の壯者あれと實体よて生れ、芝の濱の子も五年の時に両親も別れて渠の従弟に中る漁師の三藏が引取て家へ置しが此吾儕が漁が好ゆゑ三藏の家へ度々行所から頼れ八年の時よりして小僧よ遣ひ仕上た男魂魄さへも見抜たれば和女の婿と究るに附き三藏のモツ世ふじさ人ゆゑ養子ながらも自今の主個三吉に話としたれば年若あれど利發あ



者どて大きに喜び惣三郎が出世をしたら親父も草葉の蔭にゐて喜ぶ事で浮坐りなせうと言  
ゆる和主が當人を呼で心を聞てくれと頼で置事なれば明日の幸ひ金杉まで用事もあれバ  
其節に芝濱へ行き挨拶を聞て来やうと思ふの今年も一とや一月足らず日數もなければ話  
しを究春の早々婚禮をさせる積りの吾儕の心夫ゆる今夜も話す譯と言に娘の嬉しきか恥し  
きか只顔赤らひれど母のお茂世の敬々敷本夫に向つて手を支へ此身計りか娘までお救ひ下  
され其上に女房娘とは戀愛も並々成ぬ十六年脊丈を延して婿を取り身此代までお譲りと  
い恐しき程冥加な仰の娘も吾儕もお禮の外に言葉もあしと言うち芝の成刻の鐘告れば  
主個も是を聞安心せしどて打笑つゝ各自臥房に入人も譯ある夫婦と親子の由の後に至りて  
自然と解らん

第九回

赤繩未だ結す飯倉の町  
入水生を得る芝濱の浦

斯て伊勢屋の主個安兵衛の其明る朝芝浦ある漁夫三吉の許へ至り娘お峯と惣三郎が婚姻の

事と濱へ再度相談したりしに三吉の喜ばしく手綱の雑魚の羹にて酒を出して勤たる節に  
其坐の酌に立し那首等修たりも見も掛ぬ美人であれば安兵衛も慢に見惚て手に持猪口を  
落す計りに有たるがやうくあし心附き此娘御の何れのこと言ひ三吉微笑て家の者ども余處  
の者とも未だ判然と究りませんが先大方の家者多く是に附て種々のお話し有のも外  
あらず然も先月中旬ごろ降出す雪の頻りにて向島なる請地は坐る平常は最負にある隠  
居さまがお淋しからうと前の日に捕た魚を携へてお手前物の船に乗り伺ひお馳走に  
成ての歸りのモウ初夜すぎ雪霽渡り月の出た夜川の船の兩國を越ると間もなく堅川筋へ掛  
れば川と横切て一つ目橋の下よりして流れ出たる女の死骸月影に見て吃驚したれど未息さ  
へも少あるやう身受たりし船へ上介抱すれば息出さるお引汐時の下り船疾さを能と此浦  
へ歸つて濡た着物を脱せ幸ひ平常貯へゐて氷毒拂ふ稀代の妙藥元大坂町の高木で賣る清  
心丹おと吞せつゝ容子を聞バ林町の或町人の娘までお勝どやし年の十八幼稚時に實父母  
に別れて繼母の手に掛り責さいなまれ酷められ幸ひ月日と送るうち母のいよく吾儕を憎



み今宵も背く物置へ入て折檻されたるに今此世に有甲斐ありと思ひ定めし此身投生命も  
 共に難面て蘇生たる悔しさ願ふの母が死せしと思ひあるこそ幸ひ此まゝにお置きされて  
 下さらば炊水汲み煙り焚く蚕が勤も厭ねば家へお返しおさる事のお許しおされて下さいと  
 分つ口説つ言とも聞ず親の名さへも明さぬもの無理にと言ほどの様も不了簡さへ出し兼ま  
 じく助上たも因縁ゆゑ佛作つて魂魄入ると世の俚諺も言通り此まゝ置たが能らうと思へ  
 ば母にも相談するに母も反つて夫が能くやしますれば家へ置妹のやうさ此お勝不束者で  
 修茲りますが久後ともにお目掛られてと話す添よりお勝もまた俱に其身を頼けり安兵衛の  
 つくく聞し話にお勝を憐れと思ひ事に勝れて容色に心迷ひて其後も物三郎が事に假托をり  
 とり茲へ問来ての物など恵やりたりしが後にの思ひ耐かねてお勝を外妾にしたさ由を言入  
 たるに三吉の年若きれども理に敏ければ左様事有ましては新造様へ濟ませねばとし  
 ばまば言しが聞入ぬ五十男の色好みを是非なくお勝に話して見れば此方の家に何迄も然修  
 厄介に成てをるを心苦しく思ひたる事にておれは此身と任せば厄介を略さたしと首も

一理ある事なれば三吉も今非なく承知の  
 旨を告たるにぞ安兵衛の打喜び本芝一丁目に  
 世帯を持せ外妾となし其許へ通ふて家の事  
 構はずお勝に魂魄奪れるればお勝物三郎が婚  
 姻の事さへ忘れ果しが如く迂闊くとして翌  
 應慶四年の六月中旬まで過しけりそも此お勝  
 の何者ぞ是則ち彼のお辰が素生を偽り名を偽  
 り三吉よ身と寄たる者あり案下某生再説仲間  
 角藏の不知親時松の二つ目橋の橋上より續て  
 川へ飛込しその身を連れまた一つのお辰を  
 救ん心ありしが早き流れの引汐にお辰の骸さ  
 へ探り得ず殊ふの嚴冬雪中の氷よ浸りて身体





も動ぬ計りに凍しかばやうくにして一つ目の橋の下より這上り脊後を見れば僅にたゞ五  
六町隔りぬれど入水と認て退手さへ掛り來さきバ時松の茲に少く安心かし氷は濡たる衣  
類を絞り火に當らんと思へども此所等の町家はや戸を閉ぢ詮方あければ兩國まで到りて  
彼所の夜明し店へ這入て仕度をせん物と思ひついで南の方へ一町餘り行過る頃ハ二更も  
早過て往來稀なる辨財天の前へ來れば向ふより月を灯に一個の旅人急ぎ足して此方へ來る  
と時松の疾くも見て幸ひ往返の人さへも度絶てぬれば彼奴を殺し衣類を剝取脱代つ路用を  
奪ひて高飛せんと足音盗み側ある小蔭に隠れてゐるとも知す過る旅人をやり違ひし言葉も  
掛す咽喉を締んと首筋取しが此旅人も腕に覺えの有者ふや驚あさからも振解さ時松が手を  
取より早く大地へ挫と投附て身軀を押し上へ登り身動ささせざる柔術の精妙角藏が姿をつ  
くづく見て追剝さどよめ似合ぬ人跡殊に惣身水に濡た仔細ぞあらん早語れと問れて此方  
の思ふふ増し旅人の力に避易あし苦しさ聲をふり立て吾儕の悪事のある者ゆる入水と見せ  
て身を脱れ濡し衣類を脱捨て是より落んと計りしより和君の衣類を奪へんと爲し甲斐なく

遅れを取てい今更力及ばぬ生とも殺すも和君のまに／＼勝手次第と言切てあとの言葉  
もあらざるに旅人の聞て打點頭流石悪事をする程有て思ひ切のい、其言葉夫と聞て助て  
やるど角藏と引起し背負來りし風呂敷包を開いて中ある着代の衣類を出して是と脱更て早  
く落よと勸たるに角藏の夢かど計り打喜びて脱更れば旅人の帶止解捨て是をも締させ此外  
に懐中かゝり金五兩を出して路用を取するに角藏のいよく感じ累々の此大恩いづれお  
禮に參りたければ苦しからずバ宿所姓名のイヤ家も定先す名も有らず年中旅から旅へ掛  
け歩行も世をバ忍ぶゆゑ笠さへ取ぬ位なれば縁が有たら又累て會とき名をバ名乗とせん  
と言れて此方の本意あげに然いふ身あて有かれバ強てやすも何とやら吾儕ことハ假名を  
角藏また本名いと言んとするを旅人の急止此方が言ぬに其方の名前を聞ても可笑もの  
夫も是も後の再會少時も早く此所をといふ眞切を無よせじと角藏の禮も其所／＼に兩國の  
方へ行しあど旅人の渠が脱捨たる着物を捨んと引立れば何やら紙に包たる物のあるにぞ手  
に取上まづ着物をバ川へ捨彼の紙包と濡たるまゝ照月影に透し見れば弘化三年正月元日



と記しある臍の緒包み手跡に覺えの有たるか小首を傾け指屈敷へ何やら一個思案あしいと驚死たる面地して素來し道へ角藏の跡を追んと二足三足踏出せしが思ひ返し臍の緒書と懐中ふし吾妻橋の方へと行たる此旅人の何者ぞ且善人か悪人か後よ至りて詳細ある可し惜も角藏の旅人の情あ身を脱れ夫より兩國の夜明しに入り空たる腹を繕ひて其所に一夜と明しつゝ明る日知已ある麻布廣尾の原の破落戸銀市方へ身を寄て半年餘り忍びけり

### 第十回

投身の女身を殺さる赤羽橋  
救身の男身を助けざる廣尾原

芝金杉に毘沙門天有り是れ遣れ傳教大師の作にて江戸三昧の毘沙門と稱し牛込神樂坂の善國寺淺草山谷の正法寺と俱に同木を以て作りしとて常に諸人の參詣絶す中に就て月毎の寅の日の縁日と稱しつゝ手遊小間物その外の商個いづれも露店を廣げ晝夜の賑ひ頻ありお勝のお辰の外妾の樂な身躰の詮方あしお寅の日毎にの間も近き此毘沙門へ參詣あしぬ今日も其日に中ればとて六月下旬の暑さ凌ぎ日暮方より家を出でまづ本堂へ參詣し縁日立し其中

を草花植木金魚屋の前とも言す靜に見巡りとや歸らんとする節から碯と行合ふ一個の男のまがふ方あき別れ程へし角藏の時松にて有しかば其驚の此方計りか彼方も思ひ掛すと計に暫し言葉も有ざりしが茲の往來話しも成ねばど兩個邊の小料理屋の二階へ登りてお勝の其身を安兵衛に寄たること角藏の旅人の情に身を脱れて麻布ある廣尾に寓居なしぬること互に越方を話しとるお辰の角藏を伴ひて我家へ歸り留守居する下婢も幾干か金を取せ口止あして泊らせけり是より後の角藏お勝の安兵衛の目を忍びつゝ不義の快樂を採物から安兵衛の毫も是を諷す反つてお茂世お峯の兩個の早晚お勝の事と聞心痛あせども兩個が受たる恩の多ければ更あ夫どの言ざりしが此頃聞ばお勝にの密夫の有りて通ひ来る由誰いふとさく言傳へて耳に入しにお茂世の驚き今の詮方あらじとて面を犯して主個を諫め夫ゆゑに依り婚姻を延し置あば兩個とも若き者ゆゑ何様も不了簡さへ出すまいとも言れぬあればと種種に言しと主個の打聞て早くもお茂世に知れしかど一時の大きき驚きしが自己が娘の可愛さど格氣を混て如様か事と言出すあらん此身代で外妾の一個や二個置とも隙りに成可き事



あらず殊もお勝の其様者にて非を何をいふと日頃に似げなく一個の女に迷ひ行ての理も  
分らず拳を揚て打据置き直にお勝の方へ至り今日云々の事ありて餘りに心地悪けれバ妻を  
打据來りしと語にお勝の我不義がはや露れしか是にての長くも茲にのゐられねバ角藏が來  
た其上で相談せんとい思へども色も見せず何氣なき体にて待遇しけり此方のあとみ女房  
のお茂世の本夫が日頃に似ず此はど行ひ荒々しく打擲あして出行れしに其悲さの言ん方さ  
く娘お峯も母親の心を推して慰むる胸泣分ての最とます涙と隠しモウ泣ねバ和女も行て寐  
るが能いと案じる娘を出しやり跡の再度涙なりしがやうくみして目を押拭ひ家の爲とて  
やす事も母子が受し大恩の枷に掛られ惡さまに探る、此身の憂辛さ然とて是と言ず居る  
バ後に至りてどの様も難義も來らん家名も汚さん寧此身を殺してありと本夫を諫し物さら  
バ最鬼々敷心の角も折てお勝が事を斷念眞の心に歸りあバ娘が末も頼母敷兩個が受たる萬  
部が一の恩も返すと言物なり然じやくと思案を究め硯取出し諫かね身の古川の氷屑と成  
バお家大事と思し召あらお勝が事の思ひ切り娘の事を此末とも願ひますると一伍一什を書

殘すさへ二世の縁薄き墨色生命毛の筆の運びも儘まらぬ浮世と嘆つ書置を認め終り硯箱の  
上へ差置脊戸口より抜て死なぞ行にける斯との争で夢おだも知ぬお峯の母親に別れて閨房  
へい入しかど悲嘆も迫りて眠りかね慢々地目どろみ目の覺れバ秋の夜ながら更ゆきて増上  
寺の鐘更々とはや丑三を告にけるお峯の寐られぬまゝ小便に行て歸りに見れバ母の臥房お  
有らざるむぞ度胸と突て不審と思ふて見やる枕元の硯箱ある其上に一通の上書に書置と  
記しあるを見て吃驚あし採手遅しと披き見て讀下しつゝいよく驚き墨の跡さへ未だ干か  
ず床お母の温暖味の出ても未だ間のある事と思へバ他人を呼起さんより直にいとをバ追  
掛てと心も慢雨戸を練明庭口よりして母親を慕ふて出て南の方二三町ほど走り行き赤羽根  
橋の邊へ來て其所か此所かと川の面橋を渡りつまた戻り左右の川岸を辿れども夫かと思ふ  
齒もあく後の月見る今宵さへ空の晴ても胸の暗其所に轉びて泣おける此時廣尾の方よりし  
て面と包し一個の漢此所等へ鶴鷺く來りしがお峯が川邊と探す容子を小蔭に忍びて篤と  
窺ひ其所へ立出聲を掛此真夜中よ此邊を探しては坐るゝ何人も問れて今い包も敢ず吾儕の



近所の者なれどチト仔細あつて母親が今宵古川へ身を投ると書置をして出たるを跡で氣が付き打見て驚き暮ふて此所等を探しぬる所であると言けるに男の聞て打點頭原來此方の其娘か吾儕の此先廣尾に住む大工の熊といふ者だが仲間の者と三個連で今宵神明前の棟梁の家へ呼れては馳走も成た歸りに此所を通り掛るど一個の女が身を投やうとする故に無理に止て家を聞き仔細を聞ども毫も言ねば一先吾儕が家へ連れゆき落附てから後に聞ふと三人等く送つて行く途中で吾儕が引返したの實の跡から尋て來る人でも無かと思つたのが勿怪の



幸ひ和女さんよ會たも實意の徹つた譯か左も右吾儕と諸共に廣尾へ來りて母親に會て話しをさるが能と嘘か實か知されど眞實見ゆて言けるにぞお峯の死したる人に會ひ海月の骨と得たる心地し母の必死を救れたる禮と述るも手を合せ拜むの外に所作もあし男の頻り急して少時も早く我家へゆき母御に安心させるがよいと言はばお峯も喜びて伴はれゆく道の程十町餘りも早過て廣尾の原ある邊ある男の家にぞ到りけり其時男の懷中より鍵を出して錠を明け遣入と頼て火打箱を探りて火を打行燈へ點してイザと言けるにお峯の登りてつらつら見れば隣家もあらぬ一軒家柱傾き壁落て二階の一間下の一間僅に二間に過ずして席薦の破れて荒庭を敷たる状は能く似たる見るも妨嫌景状といひ母の素より此外一人一人も居らざる耳か灯火も點さず有たるの最不審と茲に至り少く疑念の起りたれば埋火起と主個と止め少時早く母親に會とうは坐れば何處にをるかか會せなとつて下さいと言はば男の莞爾笑ひ其母親の茲よのぬ夫とあるやう言眩めお主を茲へ連れて來たの能代物と見たるゆゑ吾儕が掛たる情の掛民大工の熊と言たのも偽りの名で本名の麻布廣尾の饅市と他人に知れた破



落戸と初て現を思根造りお峯のハツと驚さつゝ呆れて顔と望先けり

第十一回

於美音を勾引て鏡市木更津へ賣る  
安兵衛を嘘喝て時松五十金を奪ふ

お峯の初て聞たりける鏡市が言葉に驚き斯てハ茲に長居も成すと周章狼敢遣出さんとする  
を鏡市ひひ捕へ手早く繩よて括し上げ側の柱へ縛り附幾千地多場多騒いでも泣叫ても世の  
中を離れた住居の一軒家世間を廣尾の原赤が狭くも渡る已が身の博奕打とい表面内證ハ  
他人も白波の夜働さして今夜もまた出掛た途中で見掛た女調子を合せて連れて來る娼妓に賣  
て大金を儲る積の吾儕の胸笥否たといやア詮方がねへ此頃家に居ハの相棒が歸つて來てか  
ら二個で散々荒淫だ上に和女を殺して仕舞覺悟とせよと威しの強面お峯ハ悲嘆やる方なく  
實の父親ハ生れぬ先に別れてお顔ハ見もしらず後の父親ハ大恩の有甲斐もなき邪見より母  
親も非命に此世を去り又も此身にかゝはる難義如何のせんと思しがうち涙に暮にゐたりけ  
るが思ひ定めて此方に向ひ然いふ譯から許せとて許され難き事なれば此身と賣て和郎に金

と取する事も能れども吾儕ハ己に双親の許せし本夫もある身よて未だ婚姻ハせざれども妻  
とも思ひ夫とも思ふてゐれば此身を汚し娼妓にとてハ成難けれど其他の事あら何ありと。  
オ、然譯が譯るから無理お斯とも言れぬへ見れば大家の娘らしく舞踊三味線も出來やうか  
ら助て藝妓に賣てやらうと其夜の其ま、縛り置夜明し後に同惡の者を語ひ竹輿に乗せお峯  
を何れへか賣やりて不義の金を得たりけり斯とい知す伊勢屋にてハ夜明し後お家内の者  
が見ればお茂世もお峯も居らぬに大さ驚き家の隈々探せばお茂世の枕元に有る書置を見  
てびつくり多分主個ハ勝が所ろと思へハ人を走せて如此告るハ安兵衛ハ俱寐の夢の未だ  
覺ぬ節に朝知み取敢ず歸りて見れば此体爲み呆れながらも人を走せまづ芝浦の三吉を呼び  
仔細を語りて水の上ハ馴し事とて古川通りを尋てくれろと頼みど三吉も驚きながら委細承  
知し立出るあどあハ出入の者を集めお峯の行衛を八方へ手分とあして探らする其混雜ハ一  
方あらず鼎の沸が如く成しが日の暮る頃三吉首め陸の者等も本意あげに歸り來りて其所此  
所と普く探せば皆暮て姿も見えずと言けるハ安兵衛も今更ハ本意あき事限りあくお茂世の





死の悔て甲斐をけれとお望の家出の名動行す思ふに婚姻と延せしかば惣三郎が教唆し窃に  
 娘を家出させ他を隠して知す顔なし吾儕の奔走するからんと思ひ曲めて惣三郎のチト仔  
 細有て此家へ置難ければ何れとも沙汰をさるまで引取と氣色變つて三吉の言は是さへ何様  
 な譯ある事の知ざれば推辞もやらす惣三郎も是非なく宿へと下りけり茲にまた時松の辰  
 の方あるさりしが安兵衛が来りしに打驚きて裏口より遁て其夜の廣尾へ歸るも心なしとて  
 品川の妓樓に一夜を明しつゝ翌日此方へ来て見れば家に珍事の出来して安兵衛の今朝歸り  
 しが容子を見るため下婢をやり親のとと女房の身を投て死に娘の逐電と正可に知れば日外  
 より話して置たの今此時吾儕の事から起らぬあらば幸ひ彼所へ乗込でと思へど夫も成らぬゆ  
 え備云々と耳に口私語示せば時松も心得下婢と出しやり道具屋古着屋まで呼寄て皆賣拂ひ  
 金に代へ日の暮るを待ち兩人連立本芝を出飯倉の伊勢屋に至り時松の主個に會んど言入し  
 るに不審といふ間も早く時松の其所大胡坐吾儕の麻布にゐる不知親の時松といふ者たが



是あるも勝の吾儕の女房それと主が去年から外妾にしてゐるとか今日計ずも聞たゆゑ女  
を連て茲へ來も並べて置て四ツにする氣覺悟と定めて返答しろと突然言れて安兵衛の驚き  
あがら此女の漁夫三吉が家に有てと言を添から辰が打消登時繼母に酷くされ身を投たと  
の偽りにて實の此身の刑狀持追手を脱るゝ其爲に二つ目橋から飛込だを救れたると幸ひ  
に素性を隠し三吉の家に潜んでゐたるを和主に會て惚られたを僥倖にして外妾に成たも  
本夫に會まで暫しがうち此身を寄たる腰掛仕事此頃不圖會て見ると和郎の情が仇に成り心  
變りと言れたので口惜故に今夜一所まわゞく茲へ來た譯めて吾儕も和郎の其爲に本夫の  
刃で殺されゝ本望あれゝ覺悟の前和郎も實が有あらゝ吾儕と一所に今茲で本夫の刃に掛  
つてお呉と言つゝ此方に打向ひサア和主さん吾儕から先へすつをり殺して置て。ム、能覺  
悟だ觀念しろと豫て携ふ懐中の短刀出して鞘を拂ひお辰の目先へ突附れゝ女の目を閉ぢ覺  
悟の体安兵衛の氣も魂魄も身も添ぬうへ内外の者の見る前最ど面目あく首をうあだれ言葉  
もあく又側ある奉公人も手に汗握る計りあり登時主管の其所へ出時松と押和光吾儕共めて

其様ある事が有てゝ商個の暖簾に係り且のまた主人の恥と世の中へ廣ふするもゑ何分にも  
勘辨が願ひたく夫に附てゝお勝さんと主人の命をお助け下さる其お報の致しますと言つゝ  
立て帳場より金五十兩取出し是の些少にて失禮あがらゝお禮の印で坐りますれば是にて一  
杯召上りお心持を直してと出せば兩個の目と目見合せ笑ひを隠して時松が金で濟せる譯で  
のあけれと夫は仕事と分て言のを聞入ぬのも何とやら夫でゝ是の受て置う人二人にて五十  
兩どの安い物だが負てやらうと白刃と俱に金と納めお辰の手を取り立出しに跡のいづれも  
度息吐きたり斯て二人の飯倉を立出麻布の鋸市方へ其夜に行んと思ひしが設し手が廻らば  
一大事と直に行方の道を代へ板橋驛より中仙道へ出て大坂へ高飛なし一年餘りと過すうち  
代の一薪と成ゆきて東京はじめ各所にても諸官員のみな本妻の外に權妻と置事の大きに流  
行ハ幸ひとお辰の時松と喋し合せ所々官員の邸へもき權妻と成れば時松の博奕打の群に入  
り程を計りてお辰のみる邸へ至りて金銀を揺るも初に誰あつて斯る者とも知ざりしが果  
ハ此事評判と成もて行て權妻お辰と世の人みな綽名して誰とて畏は掛る者さへ有らず成



しに兩個の京阪の地のある甲斐と東海道と吾妻の空へ旅立來しが流石も奮然に  
へ東京への道入で道を東に取り上総へ至り木更津へ足を止めて辰の其所の玉屋といへる  
料理屋の藝者と成し明治三年春三月の事ありけり

第十二回

守袋の金圓お峯を陥入る  
博徒の妬心お辰を受け出す

案下某生再説飯倉ある伊勢屋の方めて降て涌たるお勝の珍事に五十兩といふ大金をむざ  
むざ取れし無益しと夜明し後に安兵衛の三吉と呼寄てお勝が事を委細演べ如何の者と打問  
に三吉の其創を話せし通り素生も知ぬ女と言より外へ聞く聞て驚死氣の毒がる耳詮方なく  
ぞ見えにける安兵衛の此に附てもお峯の家出をいよく疑ひそれが生死の知る迄と惣三郎  
の更めて暇と出しに是のまた多年の辛苦も氷の泡罪あらずして逐出されし口惜さ言ん方  
もあけれども争ひかねて三吉も向ひて娘御お峯さまの行衛を知ぬハ歸參も就ず然とて何ま  
で茲もゐるとも行衛の知る由あければ吾儕の是より旅商個と成てお探しやす可しと言に三

吉も夫を可とし少の資本を當がひしに惣三郎の開を持て煙艸と求め煙艸賣と成て旅より旅  
へ出にり茲に又お辰が勤る木更津の玉屋も今一個の藝妓あり其名を小峯といふて年にお  
辰に一つ二個の下あつたれと容貌よく殊に物堅さ生れにて男嫌ひと評判高く流行究むる者  
も引かへお辰の時松といふ情夫有のみかへ來る客毎に色と以て誘引入れて金を取る其体裁  
の能しからぬを仲間の事として小峯が知り察して噂と爲とやらん言しを辰が打聞て是より  
小峯を憎み初しをりも節として此邊にて大親分と聞えたる二葉松五郎といふ博奕打の勢ひ高  
く金の有にぞお辰の疾くも目を附て是を引掛金を得んと思ふにも似ず松五郎の早晩小峯の  
方を見染お辰が兎や角いふ事も知る如く待遇にぞあつたれ小峯の無りせばとお辰の頻りに  
忌み憎み然にても松五郎を我手に入て小峯を鼻を明して呉んものと夫より又松五郎に對  
して媚を獻じければ松五郎も口説ども聞ぬ小峯に容儀も劣らぬお辰に口説れ時松といふ情  
夫の有とも露知らず契り込て深くありお辰の旨々松五郎を手に入しより小峯が事と最悪  
さまよ言けるに松五郎も可愛さが餘つて今の憎が増し一つ小峯への面當とお辰が身を購



ひて權妻とする事、決し驛の尽の新道へ家居と求て普請を急ぐ此幸福を得たるお辰玉屋と  
 出るお小峯めに怪知を附んと心組吾儕が雜具を取片附る節に臨んで脊負守りが無くて發  
 ぐに女中達も共々驚き如何ある品と問は袋の淺黄縮緬中ふ守の其外にお金が十圓這入て  
 るると言れて一同氣の毒がり女中藝妓と品こそ變れ同じ奉公人の事なれば吾儕達もお辰さ  
 んへ面晴のため荷物を明て見せませうと銘々出す張文庫萬籠の底まではたけとも夫ど思  
 ふ物も亦く登時同じ藝妓なる小峯が文庫の底よりして彼脊負守の轉び出しお是れ一同顔  
 見合せ小峯の口惜く淺猿しく呆れて涙も出ざるにお辰の守を取上て中検査て十圓の金を出  
 して其所へ置き人の見掛お依ぬ者優しい顔をしておあがら他人の金を盗むとい和女の呆れ  
 た人だねへと白眼附言は小陰めて窺ふ主個が飛で出で二年たらずも茲にゐて世話としやう  
 と盲客の有のも聞ぬ片意地者夫ゆる斯様事もすると擧を揚て打擲するに小峯の悲く聲立て  
 泣き勸解れと證據ある女中へ立て主個を止るをりに松五郎の來しといふにぞお辰を首先  
 みまゝく茲を立に附ら主個の小峯を一箇の中へ取込させて行にける去程に煙脚賣の惣三郎

の國々を巡り其翌年明治四年の春のする下總  
 佐倉より野田へ出鶴牧にて營業爲果其日の急  
 ぎ木更津まで行宿を取んと立出れと丁度の道  
 ゆる途中に於て日の暮たりしが猶急ぎやうや  
 うと木更津近き裏道の川の邊へいたり着る一  
 箇の女の岸邊に立ち泣々小石を拾ひつゝ袂へ  
 入て稱名を唱ふる聲と諸共に身と跳せて入ん  
 とするを惣三郎の見るよりも走り寄つゝ引止  
 め月の有らねと春の夜の闇に霞む星灯りに見  
 れば是れおん思ひ掛ぬ伊勢屋の娘のお峯にて有  
 たりければ惣三郎の打驚きて和女様のお峯様  
 での湯坐りませぬかと問れて女も又驚きつく





づく見れば我本夫と定めし店の惣三郎にて有しに如何して茲へと言ハ惣三郎其身の上委敷演て貴女の行衛を探らん爲ふ旅商個と成て諸國を巡りをり今宵計らす此所ろを通り合せくお救ひやすも此身の眞實が通せしならん然して貴下何故に問ハお峯の母親を尋て行て鑢市の毒手に陥入り此土地へ藝妓に賣れて二年足らず玉屋の主個も悪棍にて夫と知つ、抱しゆ多みの便りもさせざるうへ相妓お辰が松五郎の事より此身を憎まつ、今日盜賊と無き名と負せ恥しめられて主個にも酷き目に會口惜く夫で死あんと覺悟せしと言ハ惣三郎の聞て驚き先づ兎も角もと其所を立ちお峯を誘引驛の中の宿屋よ泊り猶安兵衛が上お茂世が上時松お勝が上を演べ惣三郎の又いふやう彼のお勝の本名をお辰どか言よし渠の許にて遣ひふる下婢が言しが情夫ある時松のお辰くと言しに依れり設一萬一藝者のお辰の夫あらざるか又夫あらば二つ目邊で悪事を働き入水と見せたる毒婦であると己れの口より言しよ違のぬ者あらんと語る節から此話して唐紙越に聞たる旅人お兩個とも許されよと這入て己れの縁町ある大久保忠左衛門の家來にて相良則義と言ものあるが今聞し話しの中にお辰云

云といふ事あるが夫お就て我屋敷の隠居の妻お辰と言るありて如此の事ありしが仲間角藏どの一條を演べ其時屋敷にての吉平と上へ差出しは所置を受させ其後にお村の死骸の此方にて厚く葬り得させしほどは一新と成しに依りて此邊の知行の残らず離れたれと奮思を思ふ百姓の招待に依り吾儕の此度殿の名代に此地へ來り最早用事も済たれば明日の歸らんと思ふ今宵斯様お事を降し上の明日の吾儕が玉屋へ至り主個に會てお峯どのとやらんの身を振方と計ふ可し是も他生の縁あらんと告るに二個の喜びて猶も三個お辰といひお勝といへる女の事を彼是語るに大久保家を騒かせたりし女あらんと思ひ半に過たり身斯て翌日相良則義の玉屋へ到り藝妓小峯の素是勾引の者たる事を演て頼に掛合しが主個もさる者初の中の中々受引氣色のあらねど相良の男女を宿屋へ止め四五日足を運つ、猶も掛合附たるに玉屋も今の身が怖く一言もあく勸解し上小峯を術よく相良へ渡し、に三人の安堵おしにけり

第十三回

不知親の時松初て父親を識る  
世衆兒の於辰初て母親を識る



夫の借置こゝに亦權妻お辰の首尾よくも二葉松五郎の權妻と成すまじ四五日經うち容子を  
聞バ自己が盜賊と無き名を貸せし藝妓小峯の飯倉ある伊勢屋安兵衛の娘お峯にて其夜川へ  
身を投んとしたるとり舊の奉公人物三郎が不圖助け相良則良といふ者が代人と成て掛合附  
けお峯と此方へ取戻したるまで正可に聞こを待たりたればお辰の大きに驚きて斯てり已  
が舊惡も露れおんと思ふより竊に時松と會しうへ仔細を告れば是も驚き到底此地に長居の  
成ねバ所謂行掛の駄賃仕事先が大さき親分もせよ松五郎と揺り金を取り此地を退んと牒  
し合せ別れし後に時松の松五郎の妾宅へ至り見るに今日の節よく子分ゐるす取次に出し一  
個の子分の豫て知る中ある麻布廣尾の餓市ふて有たれば思ひ掛すと時松が問バ彼方も如此  
ぬふ女と獲つて此土地へ藝妓お賣た其後お江戸を喰詰此所へ流れ此親分の所るゝあるがお  
主も是る木更津にと言バ時松の鑓市が言葉に依てやうくとお峯が此所へ來りける譯の  
分りて其身のまた豫て鑓市に話しあるお辰の此家の權妻と成たるに附き松五郎お話しをせ  
んと來りしなりと告れば彼方の本芝に外妾で有つたお勝どのの家のお辰さんで有たかと呆

れてゐると聞敷立て主個に會んと取次せしに松五郎の何事やらんと思へど一間へ時松を入  
て面會おしとり時松の和郎が權妻に抱たお辰の吾儕の女房ナせ斷りおく家へ入た吾儕の  
親不知の時松だと怒鳴附れど松五郎の毫も驚く色もあらず時松の顔をつくく見えて四五年前  
に本所一つ目の辨天堂の門前ふて救つてやつた吾儕の息子が儲のお辰の本夫かと言れて時  
松吃愕し其夜の月も有かから。世を忍ぶゆる笠をも取す。名乗で別れた恩人が。息子といふ  
のも立たあ。登時落して行たるか。名の無けれども臍の緒書にて。正可に夫と知れたるか  
這いゝ如何と時松の呆れて言葉もあかりなり登時松五郎の此方お向ひ吾儕の元東海道江  
尻の驛の者ありしが不長事の此身に多く女房お角に其方を抱かせ夜と籠め驛を落ち薩陸時  
へ掛るをり夥多の賊お取巻れ防ぎ戦ひ睡ふみ迂らし谷底へ落ち一日一夜氣を失ひしが心附  
き登りて見れば女房の賊に殺され其方の麓村の百姓時右衛門が拾ひ上げて育るよし聞しに少  
く安心おし其所を立ち退き國々を巡つて廿三年目下總にて又悪事を働き土地にもゐられ  
江戸の知己へ來る途中で會た其方夫とも知す金と衣類を恵でやりし其めとよて不圖拾し



臍の緒書お角の手跡と年月にて息子と知てい  
 慕はしく跡追掛んとしたりしが互に忍ぶ身あ  
 るゆる又會時可有可しと別れ程經て今日こ  
 で不知親といふ其方が父親を知り不知子ある  
 吾儕の實の息子を知ると語るに時松お辰さへ  
 面目あくぞ思ひたる松五郎のまたお辰に向ひ  
 時松との譯其身の素生を問れて今い包もあへ  
 ず小梅の花賣六藏が拾い子にて實母の其節入  
 永せし容子の見えて如此と大久保家のこと三  
 吉が事お勝と偽名伊勢屋の事まで詳細に演し  
 かへ松五郎の端と手を拍ち和女を三吉が救ふ  
 よも因縁あり其男ころ今の女房お新が腹の息



子にて米だ當才の其折は吾儕の大病を煩ひて枕も上らぬ其上に貧苦お追り育かね芝浦の漁  
 師三藏の許へ不知親よて遷たるありと語り了りて然にてもお辰の養母の自害し果實母の氷  
 にて死たるかと言て嗟嘆の其折から物語の聲外へ漏らん裏口の戸と開け入來る一個の比丘  
 尼の其所へ坐を占め戸外で聞し諸君の物語に附き話し移り拙尼のものと淺州瓦町に住む芳兵  
 衛といふ者の妻のお茂世が馴の果にて本夫の車力を業とあせど其實盗みと營業とあせし頻  
 と諫る物から毫も肯ず已に一個の娘のあるうへ又一個腹へ出來たる其節に本夫の上のお手  
 に掛りお仕置受てい其あどの詮方あさに惣領娘のお辰を小梅のべ切へ捨て此身を川水へ投  
 んとしたる其所を通り掛りし人足又驚き那方へ二三町遁延つゝも飛入んとあせしを止し  
 の飯倉の伊勢屋の主個安兵衛が我菩提所ある淨専寺へ亡き女房の一周忌の寺參りに行き住  
 僧と話して歸りし甲夜の間にて此身と飯倉へ伴いれ仔細を問れて云々と話す物から流石に  
 も恥てお辰を捨し事い言で過して何とあく妻と呼れ本夫と呼れ腹の子さへも安々産みお峯  
 と名附て娘にも恩有る事を聞せをりしが其後本夫のお辰といふ女に嵌り此身をば邪堅おあ



しつ其女の奸夫さへ有と聞より思に報て身を捨てと家を抜出し赤羽根橋より飛込んとい  
爲たる物から實に切難さの恩愛の糾に依りてお峯が上案じらるれば陰と隠し尼法師とあり  
容子を聞バあとの珍事にお峯の家出これが行衛を探さんと國々歩行今日茲で會バお辰とい  
ふ人の捨し娘で有たかと話す時松松五郎お辰も今更驚きて慕はしさも今は彌増り毒婦が  
心の角も折れ知ぬ事として勿体ない實の母様で坐りましたかと衣の袖に取り籠りよと計  
りに泣沈みぬ松五郎の三個に向ひ斯因縁ある親子同胞會の實も不思議といふ可し此上にお  
峯どのゝゐる宿屋へ参りて物語を爲んといふをり門口にてイヤ態々出に及バぬ事と聲  
掛ながら惣三郎とお峯を従へ相良則良此家へ這入來るも此方の何れも思ひ掛すと思ふが  
中よも時松とお辰の相良則良と言者をつくづく見れば是の之れ大久保家の用人田上金吾  
あて有しかバ又驚きてゐたりけり登時相良の兩個お向ひ珍し、お辰角藏我姓名の代りしを  
不審みころ思ひつらんが則良の金吾が實名にて相良の實家の名字なるを久しく絶てゐたる  
より弟に田上の家を繼せ吾儕の實家の名跡を立たるあれバ氣も附まじ就て今日茲へ來り

汝等が悪事の段々糺さんと爲たるに夫より先親子同胞判然あしる長物語を門邊で聞て兩  
人が悔悟をなせばはや夫までと是より母お村のわと片附仲間吉平が事なども委敷述て聞せ  
しにお辰時松のいよく先非を悔ひお茂世お峯と諸共に親子姉妹の名對面先の程より傍聴  
せし鑊市も先非を悔ひ面目あくて茫然たり何思んらん權妻お辰の側らに在る松五郎の刀と  
取より逸やく自己が咽喉へ突立んとすに一同嗟嘆と驚き其手にすがり止たる後の話しの  
次回よて一部の局を結とす可し

第十四回

兩個の男子自ら罪を訴ふ  
兩個の女子頼に佛に事ふ

お辰が自害を爲んとするを一同が押止せ仔細を聞バ泪ながら大恩のある御隠居様のお目を  
掠て不義を働か殿様とさへ殺さんと爲しに實に空おそろしく養母の夫ゆる自害さし情夫の  
弟を詭計て買母が思ある人と落し夫のさちらす實母と妹と苦ましたる罰もわり搦て加へて  
情夫の實父と知で松五郎どのゝ權妻とあり又も悪事をなさんとせし返すくも勿体あけ



れハ今自害しく亡き養父母を首どあして各位へやし譯をする心とお辰が言ハお茂世比丘屈  
 の涙ながらに立上り其成敗の母がすると言葉の下にお辰が黒髪根元より切拂ひ是より母と  
 諸共に菩提の道入可しと餘る情に人々の感心の外あかりけり兎角するうち日も暮しお松  
 五郎の酒下物を出してみちくを待遇まお茂世比丘尼の相良に向ひ明日其地を出立あらば  
 娘お峯と惣三郎を飯倉まで伴ひて茲の容子と主個に語り夫婦と爲て伊勢屋の家名を立てて  
 やつて下されと頼に相良も承知あし各自臥房へ入にける斯て翌朝起出見るに時松與市の兩  
 個が見えざるに如何せしぞと探し見れば時松が一封の書置あり與市と共先非を悔ひ兩人惡  
 事の段々を其筋へ名乗出御所分を請ひ殊に吾儕の親松五郎の惡事を此身に引受いと委細に  
 記しあるにぞ一同の見て大いお感と惡に強きい善も強しと只管譽て則良のお峯惣三郎を  
 從へ連れ東京へ歸り飯倉へ至りて伊勢屋安兵衛お會ひ三吉も呼寄て木更津の始末一伍一什  
 を語り聞せしに兩人のたゞ奇に驚くのみ安兵衛のお峯惣三郎と夫婦として家を繼せ相良の  
 本所の屋敷へ歸り忠左衛門忠堂にも又説こと一遍お辰も親子もお辰が悔悟を好し夫



お辰



より東西を送りしとぞお辰お茂世の松五郎の世話に依り背後の山の麓村に些少ある庵室を遣り朝夕念佛三昧に消光うち時松鏡市の間もあく御所刑を受たれば松五郎の是が遺骸を竊に乞受けお辰お茂世の庵室の側に葬りお村の菩提諸共にいと懇切に吊ひける斯て安兵衛のお峯惣三郎三吉どもく上總木更津へ尋來り更に松五郎に對面なし三吉の親子の情を尽し此案内を以て庵室へ到り兩個の女僧に面會をし伊勢やよりの生涯物を送らんと約しよ兩個の世の中と安々と于今彼の土地に送りぬるよし風の便りに聞たるまゝ記して勸懲の端とあしけり

記者橋塘いふ此書の殊に發售を急るゝより夜を日に次で書つゝりし物あれば文の拙さの勿論なるうへ又印刷も至急に要し吾儕が校訂を経るに遅ぢたれば他人の手に任しぬるを以て誤謬る處も多く有るべけれど夫等の只管お御海容を乞ふ

引眉毛權妻於辰全傳終

明治十六年六月廿九日御届  
全 七月 出版

(定價金十八錢)

編輯人 伊 東 專 三

日本橋區本石町一丁目廿六番地  
京橋區南傳馬町一丁目二番地

出版人 林 吉 藏

人情 蜀 魂 雲 井 一 聲 二 初 編 (定價十八錢ツ)

這書の文久の末元治の始幕府の嫌疑を受終に獄中の鬼とあられたる江尻尾花川の郷土川瀬太宰氏が傳同妻女靜江が自害の實説を合せ博徒定三が奸惡泉州堺の俠客釣鐘長次の話しをも記し川瀬が遺子幼年にして父の仇ある定三を討の美談の明治の始に至て大團圓と結ぶ人情義烈の一奇書あり

同盟出版元通三丸屋鉄次郎



東京 地本 問屋 販賣 所

同	南傳馬町壹丁目	日本橋通り三丁目	堀江町二丁目	人形町通長谷町	同本銀町三丁目	神田須田町	親父橋角	馬喰町二丁目	淺草瓦町	兩國吉川町
荒井喜三郎	林吉次郎	小植木林之助	植木熊次郎	福田清吉	武川胤昭	原胤吉	山本平吉	網島龜吉	森本順三郎	松木平吉



取府次所下	横山町三丁目	辻岡文助
同	神保町	鶴聲社
同	表神保町	秩山堂
神	區田雉子町	巖々太郎
同	銀座四丁目	山喜郎
同	木挽町一丁目	萬字堂
同	京橋區南鍋町二丁目	兎屋誠衛
同	北新堀	永峯平兵衛
同	室町三丁目	滑稽藏
同	石町	武藏藤兵衛
同	馬喰町二丁目	荒川勢屋茂兵衛
同	馬喰町	伊勢屋周兵衛
同	人形町	平野屋周兵衛
同	元大坂町	法木德兵衛
同	通油町	水野慶次郎
同	日本橋區通一丁目	万屋孫兵衛



